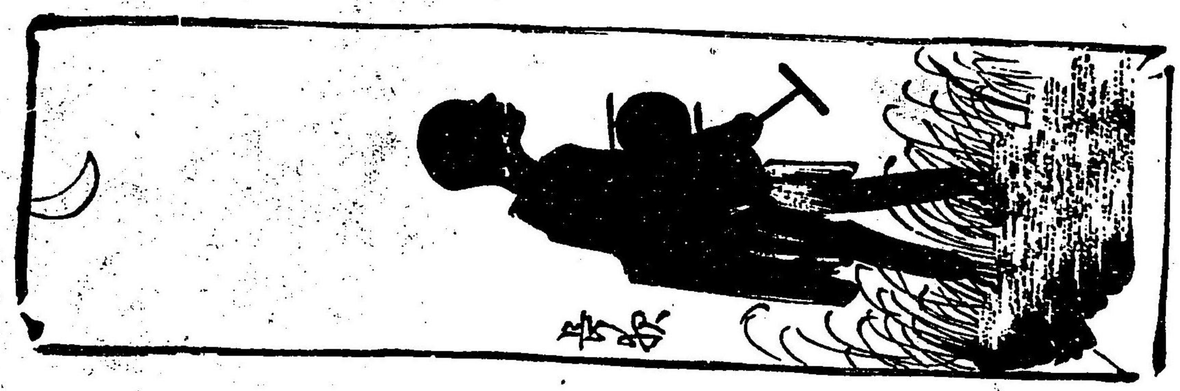
98
145

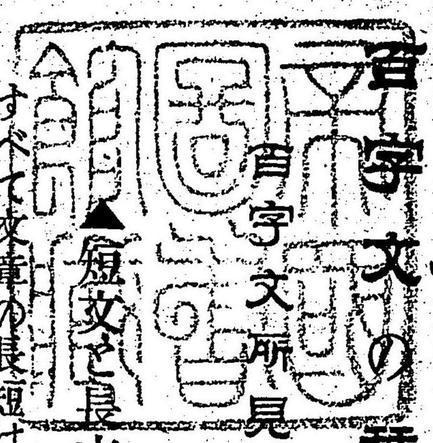
伊藤銀月 著

百字文の栞 全

東京 文學同志會藏版



百字文の栄



▲短文と長文▼

すべて文章の長短は、其必要に依つて伸縮さるへきものであつて、必ずしも、文章は成るべく長くすべきものだとか、或は文章は成るべく短くすべきものだとか云ふ、定まつた掟があるものではない。

十字で云ひ悉すべき事でも、時として十字の十倍の百字に

銀月
明治
38 7 4
交内

引き延ばさねばならぬ場合があるかも知れぬ、其反對に、百字を要すべき文章を十字に緊縮するの已むを得ざる時も亦あらねばならぬ、長かるべき文章を短くすることは固より容易の業では無い、苦心錬磨の功を積んだ者でなければ出來るものではない。

けれども、世人は獨り文章を緊縮する事の容易ならぬを知つて、文章を引き延ばす事の更にそれよりも困難なるに思ひ到らぬやうである、實に〳〵、文章を引き延ばす事は文章を緊縮することより十倍も困難である、否、ダラ〳〵と飴細工的に引き延ばす事は誰でも出來るが、長くして無駄が無く、

全篇に實質を塡充する事は至難中の至難である。

普通は、短くなり難くて長くなり易いが文章の弊である、其弊を免れて態と文章を長くするには、先づ文章を短くするの法を學ばねばならぬ、短くするの法に熟した上で、始めてそれを長くするの法を自得するのである、長くするの法は短くするの法と反對では無い、之を物の兩端に譬ふれば、文章を長くするの法はそを短くするの法の他の一端である、緊縮するも引き延ばすも同じ心持である、緊縮するの心を以て引き延ばすのである。

之を具體的に云へば、文章を緊縮すると云ふ事は、問題の

内容の全部を評論し或は説明する事の代りに、全部を代表すべき一角を捉へて、文章上の用語の中から成るべく簡單で多くの意味を含んだものを選び、其一角から底に徹して全部を推測し得べき評論或は説明を下すのである、又、緊縮する心持で引き延ばすと云ふは、其問題の内容の全部を擧げて、より大なる問題即ち宇宙の大問題全部を代表するの一角となし前と同じ方法で之を評論し或は説明する事である。

要するに、文章を緊縮することは文章を學ぶの始であつて亦其終りである。

▲百字文▼

文章を緊縮する事を錬磨するには、先づ一定の字數を制限して、或るべく多くの材料を其中に疊み込み、或るべく多くの意味を其中に押し含め、入らぬ物を無理に入れる位の心でなければならぬ。

百字文と云ふて、字數を一百文に制限した短文を、文章學院が募集するに至つたのも、詰まり其方法の一つに過きぬのである、諸君と共に文章の緊縮を研究するの趣意に外ならぬのである、又、銀月が大なる興味を以て僭越乍ら其選評者の

任に當つたのも、諸君が文章の緊短に對するの用意を窺つて自ら得る所あらんとすると共に、自分の懷いて居る多少の意見をも諸君の參考に供し、當世の流行語を以て云へば、先づ利益交換と云ふやうな譯にしやうとの考へなのである。

▲たとへば▼

一百字の制限の中に、成るべく多くの材料を疊み込み、成るべく多くの意味を押し含めると云ふても、疊み込みやうがあり、押し含めやうがある、無暗にやつてはいけない。

たとへば、諸君や我々が引越しに臨んで書籍を行李に詰め

込む場合、無暗に詰め込んだら多くは入らないが、一冊づゝ耳を揃へて積み重ね、隙間も無くキチンと並べれば、思つたより多く入ると同じく、思想の現はし方と文字の置き方とに依つて、同じ百字文でも、内容の分量が幾段にも差等を來すのである、要するに百字文は一種の技術であつて、天才のみに依賴することが出來ぬ、充分に錬磨の功を積まなければならぬ。

李白の天才は長篇短篇共に可ならざる無してあつたが、律を作らしては杜甫の法度森嚴なるに叶はなかつた、百字文は恰も律詩の如きものである、一斗百篇の太白よりは、血を吐

いて苦吟するの少陵に勝を占らるべきものである。

▲短文を學ぶの效果▼

前にも述べた通り、文章を緊縮することは、文章を學ぶの始であつて亦其終であるから、文章を緊縮する方法の一つなる短文は、或意味に於て文章を學ぶの全體である、其効果は人をして始めて文章の何物なるかを知らしめるのである、短文を滿足に作り得ぬ人に對しては、到底文章の事を語るに足らぬのである。

けれども、是れだけを以て短文を學ぶの効果となすは、聊

か空疎散漫に失するの嫌ひがある、今少しく適切に着實に、例證を擧げて其効果を示さねばならぬ。

第一、制限された字數の中に、成るべく多くの思想を含ませやうと云ふのだから、無駄を省いて、目的に適切な意義の透徹した用語を選擇せねばならぬ、之に依つて、百字文に練熟した結果は、如何なる文章を作つても、無駄な事を書かぬやうになる、批評をすれば骨髄に徹するやうな深刻な用語が組織される、議論をすれば肺腑を衝くやうな凱切の用語が排列される、叙事をすれば面目を照すやうな明快な用語が布置される、空疎散漫な文字は一個も無く、全篇キリ〻と引締ま

つて、何れの部分を叩いても鏗々たる響を發するやうになる、如何に深遠高妙な思想を有しても、目的に適切な意義の透徹した用語を選擇することが出來なければ、其文章は淺薄卑俗なものになつて仕舞ふ。

甲太は明日花見に行かうと思ふて、誰か友達を二人ばかり誘うて見やうと思ひ、誰にしやうか彼にしやうかと、首を拈り指を折つて思案の末、終に乙郎と丙三を誘ふ事に決し、乙郎の家は自分の家から近いので、先づ乙郎の家へ行つて其事を話し、乙郎の家に近くて自分の家から遠い丙三をば、自分が行かずに乙郎を遣つて誘はせる事

に順序を定め、軈て出掛けやうとして居る所へ、偶然尋ねて來たのは、近い方の乙郎でなくて、却つて遠い方の丙三だ、そこで丁度幸ひと、丙三と花見の相談をなし同意させた上、丙三が歸りに乙郎の家の前を通る時、立寄つて二人が花見に行くことを乙郎へ話し、無理に勸めても同意させ、そうして乙郎が同意したら、明日の午前八時迄に一同自分の家に集まつて、それから出掛ける事にし、其時乙郎に自慢の瓢簞を持つて來いと、丙三から云はせる事にした。

或る文を學ぶの少年に向つて、此方の口述した通りの意味

が充分に分かるやう、成るべく短く縮めて言文一致の文章にしろと云つたら、右の通りの名文を書いて出した、けれども笑つてはいかぬ、是程極端でなくとも、天下之に近くクドイ文章が少なくはない。

結構に出來ました、けれども、これでは水にふやかした文章と云ふもので、分量の割に滋養分が少ない、水分を搾り棄てゝ實質ばかりを殘し、それをカラリと炒り上げて御覽なさいと云へば、少文豪又もや筆を執つて經營慘澹の末、これではいけませんかと改めて出した、まだです、暫く經つて、これでもですか、まだ〳〵、數回書き直した揚句に、これで宜

しいと認可を與へたのは

甲太の花見に誘はうと思つて居る丙三が、丁度幸ひ其家を訪ふて來たので、直ぐ樣彼の同意を得、歸りに乙郎の家に寄らせて、自慢の瓢簞携帶で是非仲間入りをしろと云はせる事にした、時刻は明朝の八時で甲太の家に集まるべき事

以上はホンの詰まらぬ一例に過ぎぬが、後の文章は前の文章を三分一弱に縮めたものである、それでも、前の文章と同じ意味を云ひ現はされるから面白い、同じ意味を云ひ現はされるばかりではない、前の文章より分りが早くて、讀んで不

快を感じないのが取柄である、まことに詰らぬ卑俗な事を叙する文章でも此通りだから、是れ以上は推して知るべしと、態とこんな實例を擧げる事にした。

第二　叙事文でも、評論文でも、感想文でも、兎に角事に觸れ物に觸れて、文章の趣向の思ひ浮ばれることがある、けれども、それは外を歩いて居る時とか、客と對坐をして居る時とか、何か用務に取掛つて居る時とか、そうでなければ遊樂の最中とかで、直ぐに筆を執れない場合も少なくはない、又、思ひ浮んだ趣向を直ぐに文章としなくとも、後日の材料として取つて置かうと思ふ事がある、短文を練修した効果は

最も著しく斯る場合に現はれるのである。

如何に豐富な材料、複雜な趣向でも、僅な文字の中に疊み込んで、後日の用に取つて置くことの出來るのは、短文の輕んずべからざる理由である、短文に練熟しさへすれば、掌に握り匿すべき小さな手帳の中にも、數十部の大著述の材料を貯へることが出來る、銀月或時白魚を食うて一種の感興が頭に動いたから、直ちに之を文章にしやうと思つたが、友人と飲んで居る最中であつたから豈夫失敬と云つて筆を執る譯には行かなつたた、そこで已むを得ず、紙の端へ其要點だけを書いて置いたのは左の短文。

いくら高くとも憎く、なきは汝なり、鍋は白魚に生海苔貝の柱に萠やし三葉、此時の酒は銀の釜にて精釀したるが好し、寒梅の蕾を嚙み、白魚の骨をしやぶりて、濁れる血、頭に滯らず、魂は逝く千鳥より外泣くもの無き眞の夜中、佃の漁夫が漁火振る小手の上に、霜や白き魚や白き。

此後二ヶ月ばかり經つて最新東京繁昌記下卷を編輯するに當り、此短文が材料になつて、可なりに長い左の一文は編中に加へられた、

いくら高くとも憎く、なきは白魚也、東京的趣味の結晶

して、細長く小やかなる玉となりたるに、神が一つ宛念入れて生命を吹き込み、極寒の底恐ろしき水を世界として、自在に星影に戯れて閃くの權能を賦與されたる、此靈なる小動物は、潮に漂ふ海苔の切れを衾となして眠ること幾夜、水稍溫む三月中旬となれば、其腹櫻の蕾の如くに色つきて、玉の子の薄紅刷ける卵を孕むなり、されば、眞に東京ッ兒に珍重されて、玉を饌するが如き價を賞せらるゝ白魚は、千鳥より外泣くもの無き眞の夜中、佃の漁夫が漁火振る小手の上に霜や白き魚や白き、傾くる四手網に、觸るれば消え失せん二三匹ぞ貴し、期節は

寒に入りてより立春迄の間、時刻は午後の十時より、漁火も氷るばかりの寒さ、船板に白魚こぼせば、霜に煮にて聲あり何等の趣味、水黑く船を動かして、寶を返せと迫るもの丶如し、此絶頂の詩境より生れ、骨露はなる水晶の身をチョボに並べて市に送らる、鍋は白魚に生海苔貝の柱に萌やし三葉、此時の酒は銀の釜にて精釀したるものならざるべからず、何ぞ初鰹魚を待つて布子を殺さん、南無白魚、凩吹き盡し霜降り盡したる冬の精神、君となりて我腹に入る、寒梅の蕾を嚙み、白魚の骨をしゃふりて、濁れる血、頭に滯らず、汝眞に東京ッ兒なら、

襦袢一枚になつても冬の精神を喫せよ。

右は、詰らぬ一つの短文が小著述の材料になつた例に過ぎぬが、之に依つて推せば、優れた多くの短文が大著述の材料となり得ること言を俟たずである。

▲百字文の價値▼

百字文は字數に制限を與へた所の短文であつて、短文を學ぶの効果は以上述べた通りであるが、それは唯短文の練修及び短文其物が何かの用に供せられたる場合を述べた者であつて、語を換へて云へば、短文其物が目的たる場合でなく、何

のか目的に對するの手段たる場合を述べた迄である、百字文の價値に至つては、是から述べねばならぬ。

十字の格言、二十字の詩句の中にも、不朽の眞理は含まれ無限の美妙は蓄へらるゝ如く、一百字の短文を以て、天地を動かすの大感情を響かし得られもすべく、鬼神を驚かすの大計畫を說き得られもすべく、日月に迫るの大理想を述べ得られもしやう、即ち、何の用に供せられなくとも、何の目的に對する手段とならなくとも、百字文は百字文として存在の資格がある、存在の權利があるのである、諸君百字文を輕視してはならぬ。

勿論歌ふべき詩と讀むべき文との差違はあるが、タツタ十七字の俳句に一生を委ねて悔ゐない人があるではないか、三十一文字の和歌に全力を注いで自ら怪まない人があるではないか、そうして、是等の人々の中なら、千古の大詩人と呼ばれ、偉人と稱され、聖者と崇められる英傑が、昔から少なからず出て居るではないか、百字文は俳句や和歌より制限が緩くて局面が廣い、詩の方面に於ては、俳句をも和歌をも新體詩をも、打て一丸となして此中に消化することが出來る、又文の方面に於ては、美文に屬するものをも實用文に屬するものをも、あらゆる種類の文章を悉く此形式の中に嵌め込むこ

とが出來る、散文として充分に散文の用をなす上に、韵文の窮屈さが無くて韵文に劣らぬ高い格調と床しい餘情を帶ばしめることが出來る、實用としても、娯樂としても、其價値實に貴いのである。

それから、百字文に採るべき點は、制限内に多くの自由があることである、一百字の制限さへ超過しなければ、九十九字でも九十八字でも或は九十五字でも、降つて九十字でも八十字でも七十字でも六十字でも五十字でも、若し百字の五分一の二十字で名文が出來るならそれでも宜しい、十分一の十字で奇文が出來るならそれも亦可なりだ、昔し德川の名臣本

多作左工門重次が、外から妻に書を寄せて

一筆啓上、火の要心、お仙泣かすな、馬肥やせ。

と僅か十八字の中に多くの意味と複雜した事柄を疊み込み今に至る迄手紙の文の模範と譽められて居るではないか。

▲大に百字文を流行せしめよ▼

流行と云へば、何となく俗を逐ふやうで輕薄に聞こえるが此處に所謂流行は俗を逐ふの意味ではない、和歌や俳句の如く、百字文にも文界に於ての地歩を占めさせたいと云ふのだ和歌や俳句や新體詩のそれの如く、特殊の文學として一の系

統を起させたいと云ふのである、多くの人に百字文の趣味を傳へて、同趣味の人の結合から成る大きな文學的團體を作りたいと云ふのである。

一地方で、百字文を好む人が二三人若くはそれ以上あるなら一ヶ月一回或は二回百字文會と云ふを開くが宜しい、隨意に作つてもよければ何か題を課しても好からう、同好者間で手紙を往復するにも六かしい用向でなければ成るべく百字文を用ひ、日記を作る人なら、百字文で以て簡潔に毎日の事を書き記すなど、どんなに趣味があらう、次第に同好者の數が殖ゑると、隨つて其會が面白くなつて來る、同好者間に一種

の友情的關係が出來る、共に散策し或は旅行する、百字文を集めて編した紀行が出來る、花見の宴、月見の筵にも百字文は闘はされる、俳句的趣味を有した人も、和歌的趣味を有した人も、新體詩的趣味を有した人も、散文的趣味を有した人も種々に系統を異にして互に一方の趣味を解し娯樂を測るどの出來なかつた人々が、皆々城府を徹して新しい一系統の下に集まり、新版圖を開拓して新國家を建設するに至るのである、なんと愉快ではないか。

さうなると、全國の百字文同好者の結合を計り、其連絡の中心に當る所の本部が東京になければならぬ、百字文の研究

を主として、全國の同好者の機關に供する所の雜誌も必要になつて來る、追々は自分が其番頭役になつて、諸君の爲めに樂しき勞働に服するの時來らんことを望むのである。

諸君と共に百字文の旗を押立てた我等が前面には、未だ何人の領分にも屬せず何國の版圖にも入らぬ、廣漠たる原野が展開されてある、我々は如何なる國家を建て〻、如何なる政治を行なうが儘である、さうして、我々の版圖は是迄人の蹈み入らない新天地であるから、之に國家を建て政治を行ふに當つて、我々の參考とすべき歷史が無い、何となれば歷史は諸君と我々が其第一頁を作りつ〻あるからである、俳句や和

歌には、古人の句を剽竊したの燒き直したのと云ふ騷ぎが能くある事で、新派の俳句や新俳の和歌と云ふても、從來のものより纔に一歩を進めたと云ふたけに止まり、若くは其形式を換へただけに過ぎぬのもある、之に依つて、俳句や和歌は多く古人の作を腹に貯へて其想を養ふと云ふ便宜がある、其代りには、剽竊でもなく燒き直しでもなくて、不思議にも古人の作と暗合すると云ふ、奇なる弊害に陷るを免れぬ場合もある、けれども、今百字文を作らうとする人に至つては、前に古人無く我を以て祖となすの拘負があるので、創造の苦みを嘗める代りには創造の功をも收めるとが出來る、サッパリ

して小氣味がいゝ、剽竊しようとしても剽竊すべき種が無い
焼き直さうとしても焼き直すべき原料が無い、暗合しやうと
しても暗合すべき前作が無い、多くの中には、萬一御互の作
を剽竊したり焼き直したりすを者が出ないとは斷言出來ぬが
そんな者は獅子身中の虫、百字文の進歩を妨害する毒物とし
て、早速抓み棄てれば濟むのである。

▲終りに臨んで▼

百字文に關する細かい注意は、諸君の投稿に就いて、心附
き次第批評代りに述べやうと思ふから、諸君は脱漏無く目を

通して下さるが宜しい、終りに臨んで銀月自作の百字文一篇
を景物に添へる是は最近の（此稿を作る時より）拙作で、偶
然此頃の風物に感興を起させられたものであるが、何も旨い
から諸君の模範に示さうと云ふ自惚れではない、諸君の高作
を澤山に拜見する代りには、一つでも自分の作つたものを御
目に掛けなければ、何だか卑怯に當るらしく思つたからであ
る。

晝の朧

朧は夜のみか、今將に開かんとする櫻の精氣は欝勃として晝の朧に大都を包めり、僅々百數十萬の人類能く叫喚するも何をか爲さん、幾億萬顆の花の蕾が色づきつ膨らみつする無聲の活動の如何に恐ろしく凄まじきかを見よ

（字數壹百字　四月一日作）

但し句頭を一字數へ込みて

百字文

伊藤銀月選

（二等）緋鯉　栃木縣茂木町神井　佐藤長之助

餘り暑いので妹と後庭へ出れば池の面には數多の緋鯉が浮き上りパクパクと水ばかり呑んでゐる可哀さうにと妹が餌を撒けば水底で戰を始めたのか其處此處へ波紋が出來て美しい河骨の花が金箔を散らすやうに碎けて浮いた

銀月評　活動せる繪畫、文字皆人面を吹く

（三等）太平洋の一滴水　麹町區飯田町四ノ二　高木六歩

忽然として覺むれば吾れ泰山の頂に座す乾坤を俯仰して誤りて溪谷に墜つ龍蛇の腹に隱るゝ六十年一夜雲に乘りて東海に降る放浪して四海に周く百度鰐魚の鰓に入り千回巨鯨の胃を往來す茲に老る正に億万年

銀月評　奇想奇文、巖穴の中に坐して鬼と共に讀むべし

(四等)　かたみの湯呑　府下日暮里村元金杉　安藏五想

僕の湯呑は相馬燒で僕を產むと直ぐに瞑つた母が平素用ひたものださうな渦を解いた後微暖のある九曜の星の周圍の星より大きい眞中の凸な星を吸ふと乳の出るやうな氣味がする

銀月評　語、人を泣かしめずんば死すとも休まず

(以下六篇第五等)

三大禪　山城國葛野郡川岡村　鈴木芹波

蛙の鳴く聲は愚、愚にあらずんば大に達せず、田螺の鳴く聲は幽、幽にあらず

んば深に到らず、蝸牛の鳴く聲は寂、寂にあらずんば神に通せず、予はこれを三大禪といふ。

銀月評　悲を燒き水鷄を煮るの境を尙ほ殘しとなす

殘れる腕　麻布區市兵衛町二丁目　野田黑船

石炭に燻り汗にまみれ肉こけ血を流し尙ほ飽き足らで我は鎚持つ手を奪はれぬされど船は成れり青葉に飾られて錘綱に繫れり花の如き令孃綱を斷たんとして手斧を振りぬあゝ山なす巨體動き半ば殘れる我腕は躍りて止まず

銀月評　無名の豪傑をして詩中の人たらしむ

笹舟　摂津豐能郡岡町　田中瑜瑳子

村の小女の四五人紅の裝かゝげて雪の脛里川に浸しつゝ手に々々持てるは笹舟一二三の掛聲勇しくやがて港離れし初航路、各々が力の足ぶみは小波立てゆら

るゝ折柄風に緋桃の一輪中なる舟へと、ぬしは長者の獨娘。

銀月評　春の中の春

麗文字

弘前市品川町百番戸　奈良賀千雄

疑ふ勿れ宇宙は唯是れ二ページの書籍のみその一面は天にして他の半面は地なり。天地寂として星斗闌干たるの夜我れこゝに宇宙の書を繙て莞爾。嗚呼星―雲―瀧―森―書中に輝やく好個の麗文字ならずや。

銀月評　足下此書を何と讀み得たる、道へ、聞かん

子供

越前敦賀郡立石岬　水野孝直

吾は幼き子供を集めてお伽話を語るを好む彼等はおどけたる「舌切雀」の如き家あり衣服あり寶ある雀のあるべからぬ事を知るなり知りて而も疑はず尚ほ語らん事を乞ふ嗚呼これ高尚なる美感なりこれやがて詩なり歌なり

銀月評　此人勉めて怠らずんば、哲學者にして且つ詩人たるを得べけん

鵜と鴉

四谷區坂町六十八　石谷蟹哦

鵜と鴉とは相似たる鳥なれば字まで擬はしきも無理ならねど枯枝に止るは鴉よりも寧ろ鵜の本色とす芭蕉の自筆にも枯枝に鵜とある者を鵜の眞似する鴉ども鵜呑に讀み下して字餘りとせるこそ一入面白く覺ゆれ

銀月評　選者幸に子が文の鵜を他の文の鴉と同視せず

（以下五篇第六等）

▲歸省

上総伊藤城南

今年十年振て偶々歸省したので振分髪の其の昔まゝ事遊びの妻として睦しかつ

た人に遇つた互に久濶を述べた外に何も語らなかつたが顔を赤めた彼の背に玉の様な稚兒が負れて居てかアちやんと呼んだ

新潟市　諸橋峰花

▲越後七不思議 濤の題目

帆檣を斷る斧の音は呪咀の如く神の御名呼ぶ舟人は生死の間を轉々す。時しも英僧日蓮は天魔鬼神を叱咤して濤に七字の題目を書き一喝する其刹那天上天下和ぎ渡り靜かに溶る海の上に黄金の文字輝きぬ長に南無妙法蓮華經

芝　前波古帆

▲『知れり』とは何ぞや

砂糖を甘しと云ふか、そは未だ眞に砂糖の何たるを知らざるものなり、されど砂糖は辛しと云ふものよりも多く知れりと云はざる可らず。吾人が所謂『知れり』とは蓋し斯くの如き類のみ。

上總　小川美吟

▲死

君よ君はさまで死をなげき玉ふか。君よ死とは眠の遂にさめざるものをいふにあらずや。死と眠とは同胞なり畢竟長きと短きとの差なり、樂しき眠のさめざらむとをのぞむ、これやがて死をねがふものにあらずや。

長門　杉形貫一

▲四十九日

七日七日の營み積りて經たりけりな日數四十九夸宵は重たげなり持佛に沈む香の煙もあゝ十万億土其道は五つに足らぬ幼兒の歩み果つべき事かは三途の河に雨降れ風吹け水增して浪騷がば歸り來よ我兒悲しき母が心を知りて

（以下十篇第七等）

大分　和田桂香

▲噫無情

終日此處彼處あさり廻つて、思ふ程の餌も拾はず親子三羽の鳩、三枝の禮正しく暮れ行く空を仰いで、空腹を忍んでゐると、これも終日何の獲物もなき銃獵家に見出され、一發の音に命を絶つたのは親か子か、噫無情。

▲無題

小石川　雨江

劍の如く衝立てる巖角より危うく生ひ出てたる一本松の根方に兎の子一匹暖かき春の光を浴びつゝ靜けき眠りに女神の御胸をや夢むらむあな危うしや麓に敷ける八重雲の裏には岸を嚙み煙を吐く溪川底の深さ幾尋

▲蝶か花か

熊本　岡本灯窓

降り倦みし五月雨漸く止みて力なき雲間の日蔭若葉に墾む晴れなば暑からむ散れる紫陽花の片々蝶の飛ふそれのごと白羽舞ひ立つ蝶は紫陽花の散るそれの如くに行く

▲涙痕錄

美濃　汲月

披電喫驚直に歸省せしも遂に母の臨終に逢ひ得ざりき噫豆と胡桃と松葉に滿腔の熱情を籠らして余の首途を送られし母!!!健全て來る身を待つとは黄泉てとの意にはあらざりしならんに噫余は死屍に縋つて終日泣いた

▲雪

四ツ谷　佐々木敏雄

尊き珠求めむと山に入りし人のいたう艱苦を忍びてやう〳〵に在家見出でつ彼れ手を伸べて取らむとする時雪崩れ來て彼が身を埋めぬかくて彼は水仙咲ける雪の谷間に今も尚ほゝゑみて眠り居るなり右手に珠を握りて

▲眸

水戸　齋藤新

男の眸の女に對する危險は互に擦合ひたるのち即ち背中合せのときの距離に正比例す故にバッタリ行逢ふてギョロ〳〵やるのは存外に毒氣なし但し見て見ぬふりは例外なり

▲懷古

大阪　小松君栞

今も賑ふ高津の宮居夢の波を覆ふて立上ぼる煤烟越しに摩耶六甲の巔高く港に見ゆる眞帆片帆いつも變らぬ浪速の繁昌一目映る舞臺の眺民の富は朕が富と宣はせ給ひし昔を憶ふ

▲煩悶　新潟市　井上功

世を咀ふ惡魔の征矢に胸を射られて我は大方ならず悶ひ苦みぬかゝる時こそは
と瞑目してひたぶるに神の御救を請べり折しも黑き魔の影二つ一つは手に弓矢
一つは劒を提げてひそひそ語らひながら我前をよぎり行きぬ

▲春の日　筑前　廣瀨愚次郎

妹の春子が庭前で「まり」をついて居ると何處からきたのか猫の玉がはつたと
「まり」に飛ひついた妹は怒つたふりして頭を輕く打つと猫は驚いて側の紅梅に
登り上つたすると二三片の花葩がひら〳〵と妹がリボンに落ちた

▲嚴肅なる家庭　駿河　清水穿石

ピッシャリと室内にて物音す入りて見れば今しも母上の尺もて妹の膝打給ひし也
けり何故ぞと問へば『頂戴な抔云詞は醜業婦共の使ふと聞ければ屢々誡めしに
今も又使ひたればよ』と宣ふ嗚秋霜烈日的家庭

（以下十九篇第八篇）

▲蟾會　金澤市　山川昌路

盛夏の夕竹陰蟾の相會せるに會ふ一蟾曰我曹往々人屐の厄に惱む之を如何せん
やと一老蟾聲に應じて曰是匍匐の罪也不如自今立行せんと衆議一決立て歩す雙
目朝天前途冥々脚底闇矣衆頓悟して曰宜哉不知而人の我を蹈む事や

▲我が書齋の秋　栃木縣　青木孫作

秋の空は蒼々と澄み渡りて窓前一樹染むるが如く紅なる櫻の梢に二三羽の小鳥
の相語りつゝ枝より枝に移れるが云ひ合はせる樣に玻璃窓の内を覗きてありし
が何にか驚きけん飛びし羽風に黄なる櫻の一葉ちら〳〵と舞ひぬ

▲鷄　本郷　一條海東

天氣のよい午後であつた一羽の牡が五六羽の雌を連れて土藏の前に樂しげに遊

んで居る美しい翼を擴げて長閑に鳴いたが丁度一匹の蚯蚓を見つけたので雌を呼んでこれをやつて其喜ぶ樣を見て嬉しさうに大股に歩いて居る

宮城縣　鈴木德治

▲選　擧

甲家高利を貪る三代富一郷の尤たり乙家亦三代低利にして且仁恕故を以て富度甲より下る數等某日某議員の選擧あり兩主候補に立ちて互に雌雄を爭ふ選擧終り票數を檢すれば乙の得點正に三倍乃知る怨恩是殲慶の好適例を

福岡縣　矢鳴信

▲終列車

暗黑の闇を縫ふて轟々と進行して來た終列車が哀れや蠢々たる黑影を兩斷して鮮血は紅に轍を染めた實に悲慘小女は機母の呵責に堪かねて淨土に逃れた出陣する其兄が幾百の健兒と共に仝列車に在るのも知らずに

兵庫縣　北村春文

▲代議士

親ある人の忠言と財產の全部とを拋つて僅かに得たる代議士の地位無殘や開會

の劈頭解散の風の襲ふ所となりぬ願れば其名更に人の知る所とならず再び立たんも資既に無し妻子の怨嗟は辛ふじて一杯の晩酌に忘れんも

京都　福山枯草

▲親の情

與助爺は隣の息子が今度露國へ戰爭に行くので近所近邊の人と共に送り出でぬ暫くして我家に歸り獨り火鉢にもたれ今日の勇ましさを心に浮べ悵然として內の與三郎も居たなら嘸やと思はず佛壇に向ひしがはや目には涙一杯

熊本　大島彌一

▲新聞記者

無冠の宰相よ天爵の法官よ輿論の動機よ社會の鼓吹者よ兄等は實に忍て事に當る者なり情巷の醜話耳にせざる可ず匹夫賤婦の喧噪亦耳にせざる可ず而も身は靜思の暇なき蠶々の巷に處り世は亦新聞屋と呼捨にす噫々天なる哉

栃木　海志原喜勇治

▲小阿房宮

洋服姿殿しき官吏風生徒の少ない高大な新築照り光る學舍豪氣ジャ宏麗ジャ此

寒村で万以上の費用と稱賛する後ろに蓬頭襤褸の農夫恨めしそうに滯納田畑公賣食ふに困る者村に半分も出來た教育々々千松を作るのじや

府下　本間小笛

▲松前追分

褞袍を頭から餘念なく孤燈を友の吾耳にふと微妙な韻が入つた聽耳立てると今度は直ぐ吾家の前に嚠嚠たる尺八節は慥かに松前追分である何心無く潜戸から首を出して見た月も星も前の流も皆氷つて居る

本郷　柏木登美

▲旅より

阿保山三里は昨日に越え今日は六軒よりの徒歩に候畑打ち起す土塊より蒸す陽炎のほかり〳〵と暖きに昔は馬の背にしてなど思ひ浮べて心長閑に足を運び候外宮前に三時定宿日記帳に春の旅伊勢に拾ひし鮑殼

日本橋　三宅孤軒

▲納豆賣

雪や氷をべたい氷を童等の騒ぐ雪の街頭には菅笠一蓋たぶ〳〵の古外套に身を

埋め足は熟柿の如く千切草鞋を穿ちアイスクリームの中をびしや〳〵聲さえ凍る朝風納豆賣の小僧年を聞けば今年十三才

岡山市　三好瞳月

▲虫の音

三粒の雨に大の川荒れてあたら鵲の橋その跡のみをとゝむる岸の上に寢亂れ髪のそれともまがひてあはれ佇みける織姫何思ひけむ下界遙に馳せて草叢の虫に何をか呼くよとみてより夜毎の枕是よりぞ沾ひ初めぬる

神田　小松緑亭

◎權助の葉書

釣瓶持たずに水を汲め三度の飯も白い米、魚も肉も數多あり見る物聞く物珍らしい、國に居る氣で勤めたら金は積つて山となり田地壹町歩目の前に出來申候

名古屋　渡邊秋雄

◎弟の涙

止めたけれども聞かぬので泣かぬがよいと戒めて母が手作りの唐辛を燒いて與へた「ソレ御覽！辛いだらう？」と言へば今年七つの弟は愛らしい其眼からホ

ロリ〳〵と涙を溢しながら「ウヽン辛かアないや」

信濃　吉田依城

◎あゝ一輪の梅花

一日余は一封の書狀を手にした開き見れば中に優しき文字にて「けふ御友達と城山に梅見に參りましたら大層美しく咲いておりましたが急に去年の事を考へ出し先生が見られないのを思ひ一輪これに入れました御覽下さい」

羽後　伊藤・蓮堂

◎不遇詩人

大椿の豆ならば炊りて食ふべし徂徠の豆腐糟なら養ても食ふべし隣家の婆樣が送りたる薪三本の外には磨り凹めたる硯端の切れたる筆書き亂したる詩集質屋もウムと云ふては取るまじあゝ如何にして食ふべき

岐阜　牧ヶ野敬信

◎春雨

今朝降り止みにける小雨に木芽の一二分萌え初めたるうれし塵につゝまれたる菫たんぽゝの清められたる亦よろし海棠の花に殘りの雫を留めて朝日にもほこり顏なるこよなう麗はし吾も雨となりて花に宿らばや

近江　室谷瀧湿

◎早起と晩寢

露然笑ふが如く語るが如く朝々我れに先だちて起き夜々吾れに後れて睡るものは余が屋東の山峰是れ也余つとめて早起晩寢ふたつながらこれに勝たんと欲せども連敗す呵々

岡山　河井文園

▲闇に萬歳の聲

宵の頃より忍入し一人の曲者あり、主人氣付かず思に沈む事稍々少し、晩刻求めし某新聞の號外机上に散亂せるを取り大聲に之を讀む是旅順仁川の海戰公報なり、曲者思ず一聲萬歳と闇に叫びぬ

京都　石黒逸

▲祈るを止めよ

暗黒は照さず沈默は言なし至上に祈るを以つて心の憂悶を拂はむとする勿れ、悲しきを以つて佛に祈る勿れ鮮血を捧げて神に諛ふ勿れ、解脫は自己の心外に

求むるを得ず

陸中　及川榮星

▲神樣と草木

神樣と草木の調和を研究して見たが、地藤樣と芒、仁王樣と青葉、不動樣と杉、觀音樣と松、稻荷樣と天神樣と梅、まづこんなものだらう

淡路　川路柳虹

▲名殘り

君の新しき友は今や熱き血潮もて北なる海を染むべく行く早何事も申まじ只久しく雁信を絶ちし罪をゆるし給へ君よ凱歌筑波の山を震はすの時願くは我が靈を弔へ、解纜前一時間佐世保にて○○より

横濱　牧野夢遊

▲何れを取らん

今此所に一匹の蛇が將に蛙を呑まんとするを目擊せりと假定せよ然らは余は此の蛙を助くるが至當か或は蛇の爲す儘に放任す可きか余は此の平易なる解釋に苦しむ

仙台　矢吹榮太郎

▲雨の出征

兵營に起床喇叭に驚いて頭を上ぐれは天未だ明けす戸外は春雨蕭々として點滴聲あり宿鴉啼いて天明を告ぐ時雨を侵して一隊の步兵は出發せり四方に起る軍歌の聲、噫雨の出征之れぞ永遠の紀念なる哉

山梨　丸山道太郎

▲百字文

吾常に百字の文を造る事を好む韻文散文何れにても是を以て社會百般の事物を表示し得へし韻文としては新體詩唱歌長歌、散文としては日用文記事文論文此百字の文短とせす又長とせす是誠に文の適度を得たるものと謂つべし

京都　大塚和弋

▲音樂と宗教

音樂は心の聲なり神の聲なり人一日も音樂なかるべからず然らば家庭健全社稷安寧ならむ如何に和讃が平民的佛教の普及に功德し軍歌が軍隊を精練せしを見ずや若し基督教より讃美歌を奪ひ去らば其眞價は零に歸す

▲夜の古城

岩代　加藤荊峰

春は來ぬ寒山眠り今さめて笹川の流靜かに朧月を碎くこの夜人は花に胡蝶とあくがれて床しくも逍遙する也吾れは只一人この古城の壘頭に今昔年の英魂を吊ふなるよ滿城草深くして人もなし老梟一聲淋しく梢を渡りぬ

▲東西新夫婦

靜岡　大石星天

米國の細君を日本の旦那と婚せしめよ共に主權者なればなり亦日本の女房を米國の御亭主に嫁せしめよ共に奴隷なればなり是れ恐らくは東西一對の好奇觀前者喧號怒鬪犬猿の如く後者和風圓滿鴛鴦の如けん

▲作文記

熊本　橋本市次

百千の草花を文机の兩側に並べ文を草すること十盡夜未不成百思百考熱血をしぼりて佳作不成乃鳥林に分入り天然の音樂を耳にし清流に汚心を洗ふて文机に寄りて千辛萬苦すれども不成噫作文の道難い哉

▲山居

山梨縣　河野重利

破れし衣着ると雖も蓬生のそれよ頭髪の垢つきて顏やつる共一片我靈心高し高根に出て丶谷川の流に碎く月のそれよ此に花あり此處に蝶ありなべて仙子月照り風吹きてすべて高潔此處に好著を繙かばや亦天年を送らばや

▲春の夕暮

美濃　柴田春男

「靑やもう行かうと」草食むてゐた馬の手綱取つた脚袢襷掛の乙女夕霧こむる春の野に萌ゆる若草踏みしめて緩々と歩を移した空には夕づ丶の影靜かに淸い美くしい乙女の唄に月も浮かれて出てて東にぼんやり

▲雲の色

靜岡　伊藤孤聲

誰が爲の病ぞ褥に積る思ひの數々せめて君居ます方をも見んとや懶けき裳引いて起んとする乙女花の顏痔て柳の腰立たず辛くも椽の柱に支へて皆長き眠にさと西の空見やれば雲の色紫紺臙脂オレンジに戯いて悠々たり

▲堇

尾張　柳津露子

柳の下を流るゝ清き小川に若菜洗ふ乙女あり流れ來りし堇の一もといとしと想ひけん拾ひあげぬ水上の土橋の上に立ちゐたりし年若き貴人元來し道へ歸へり行く乙女は後見送りつ母なる人の呼ぶ聲にあわてゝ堇を袖の内に

▲雨中の嬌音

武州　三上桂花

伯女の忌日と云ふので自分も從妹も六疊の佛間でしんみりと故人の追福を祈つた春雨はまだ止まず雨垂の音が慵けに何んとなく氣の滅入つた折から一聲濕やかに鶯、二人は無音で顏を見合した多分隣りの庭であろう

▲笑ふべきかな

島根　谷口爲次

夜色沈々獨り中庭に立つて大空を仰ぐ滿天幾億の星耿又燦小なるは粉の如く大なるは豆に似る思へ我地球も畢竟彼の一小星なるをあゝ粉や豆の中に於て平和と叫び戰爭と噪ぐ眞に笑ふべきかな

▲充員召集の夜

青森　加藤定市

警報に夢破れ出場の途を急げば空に月さえて夜色いと靜なり寒氣心肝を透して何となく感慨に堪へぬ遙か向ふ雪上一團の黑き物蠢くよと見る間に一匹の裸馬肅々とすぎ去れり實に是れ二月五日充員召集の夜なり

▲好日和

小石川　星野鐵石

竹箒に塵取りを提げて尻端折りで梅樹の間を拾ひ歩く庭園邊隅一塵なし南向きの日あたりよき椽に腰を延して煙草一吸、一鳥わたらず春靜か梅か香高し風溫し、

▲說教

在近歩一十一　關口筑四

生れて以來二度聞きし說教は然かも反對の意味を皷膜に賚した、前者『皆樣は情けふかくなくてはなりません虫の命も猥りに取つてはなりません。後者『諸君は大勇ならざる不可千載一遇の好期に會す敵を倒せ敵を殲せ

▲同情の觀念

山梨　湯山鳴鳳

幼兒の泣くにぞ見れば一疋の蚤臀に嚙み付けり咄愛らしき吾兒をと腹立つ儘指頭に捻る氣息掩々横に伏すを善く視れば腹太の雌にてあり渠も又母とならんとす指頭に唾し氣付を與へ其の蘇かへらんを掛念しける

▲堇

山口町　伊藤風味

靑草に昔を忍ぶ城跡から延いた廣い野原を横切つて小い流があるその川堤に沿ふて二人の少女が餘念もなう繪日傘に笑みを包んで白い細い手を差し伸べて小さな堇を摘むその姿が花のやうに水に寫つて居る

▲紅梅

神戸市　增田政次郎

鈴の付てある折戸を押すと庭は一面に紅梅の花が紅を競ふて居る庭石の上赤い鼻緒の付た下駄が一足其上に小さき黃色の蝶が止まつて居る奥庭へと廻ると琴の音色が聞えだした我れは暫し琴の音に立ち止まつた

▲自愛心

福井　鶴野庄三郎

姪あり今年四歳りゑと曰ふ一日戯に家内にて一番可愛ゆき者は唯かと問へばりゑなりと答ふ眞なる哉人誰か自身を措きて先づ他を愛する者あらんや若しあらば小にしては親を賣り大にしては國を賣るの徒なり自愛心尊むべし

▲金柑

總陽　遠藤かすみ

思へば妹が逝つた前の年二人一緒に此の苗木を植ゑる時、兄さん何時なるの？と問うた、そして來年に成ると答へた吾言に早くゝゝも來の間金柑は實つたが吁吾が妹は……

▲月よ

千葉　今井愛子

おゝ月よ心ゆく月よ汝こそは昔榮へし吾胸と今又咽ぶ此の胸をや知らめげに此の世の人の心は濁れりしよいとしの人は實の仇人よあゝ月よ妾は早う此の世を去りてみ空に汝と語らんかあゝ

▲梅の香り

伊豆　土屋豊秋

花ちやんお目出度うと南向の紅梅の窓に居る鸚鵡は花子の顔を見るや斯う挨拶をした是れは正月の元日斯う言うて御菓子を貰ふたのを忘れないので恰もよし花子には近々お目度い事があるので今日かその御見合ひだとは

▲羊飼

水哉生

小羊よ汝が愛らしき目白くかがやく柔毛すなほなる性質如何に我が心をひきけるかよさはれ我れはこの夷域に永く羊飼ふべき身にはあらずいとも重き勅命を擔へる身ぞや雄羊の孕むなきも今は去らんさちあれなさらば小羊

▲召集令

京都　游糸

失戀に惱んで病床に横臥せる豫備少尉枕頭に落ちし一片の召集令を見るや兩眼血に輝き痩腕勇に躍り奮然枕を蹶つて立つ取り出しなる三尺の軍刀鞘を拂つて凝視暫し凄然たる笑みは流る白刃の面

▲落花

下野　小松原秀夫

世をすて、春をかへりみぬ旅僧も花に心をひかれけむ三日月細う輝きて朧に霞む櫻の下に彳む折しも夕風颯と吹き來りてちりかふ花片縝粉と墨ぞめの袖をうちしに僧は首肯きつゝ果敢なき花に人生を歌ひて悄然と立ち去りぬ

▲人間一匹五十文

下野　細井緣翠

英雄も逝けり凡骨も逝けり吾もやがては死する身なり百年以後の人をして今日を觀ぜしめよ五十年の壽さして勿躰ぶるにも及ばぬ事也痩骨一貫御入用の方へ五十文にて讓り渡したし

▲乙女

伊豫　柴田定雄

花のお江戸の八百町花より花と賣りて行く乙女の心いぢらしき桃に櫻に岩つゝじ花は咲けどもわが身には何時か香りの留むべき

▲一錢銅貨に與ふ

伯州　早川聽松

昨夜賽錢箱に宿れば今朝は魚屋の財布に投げ込まれ晝は酒屋の暗箱中に幽閉の身となり夕邊には既に錢湯屋に護送さるゝ抔常に其居所千變万化社會の上下に通じあらゆる人情の眞味を味へし一錢銅貨よ汝の經歷を予に語れ

▲默想せよ

長門　高見茂一

起くる時默想せよ寢る時默想せよ歩む時默想せよ坐する時默想せよ我等の混亂定りなき精神はこの默想によりて汚に染むことなく濁に染むことなし默想は心の水なり熱の高き頭も爲めに平穩となる

▲平和の牧場

北海道　中島菫夢

草笛の音に我姿を見とめし山羊共は前後左右に集り來りて長く高く纖く叫ひて喜び踊り狂ふ實さ彼等は鞭の示しと共に列なして靜歩す見よ平和の牧場は野寺の鐘と夕日にあたりて白き毛色に金色の光渺暗き道に消え行く音を

▲大發明

下野　高橋木舟

噫夢か此病身で義勇隊長とは我身なから解せなんだ而も未だ見聞もせぬ浦港の側面輒越然たる所より突擊などとは實に奇であつた併し果して彼の魔睡劑を榴散彈に詰めて敵を眠らせ之に乘じて襲擊し得ば眞に快絶ではないか

▲田舍の情合

茨城　籠山款

契りし美男子今東京に在りと云ふ我れ詳に都風を語り聞かして出つれば自らも店頭に立ち嫣然として我姿を隱るゝ迄見送りぬげに田舍人の情合は此所なりと覺ゆ

▲梅月夜

近江　駒居武明

うたゝぐち濕してふと見上くれば彩雲のとばりをかゝげて笑める美人あり藪蔭の賤か伏屋の崩れて落ちん垣根に何の思を寄するや無心の花の摘まれては罪の犧牲と微笑まるゝ世に感謝す更に氣高き薄梅月夜！

△雨後の景

大和　九鬼雪子

書窓を押すに庭一ぱいに浴びせかけられた白銀の汁夕日の名殘を宿して星のよう羽濡れし蝴蝶片々溪流潺々たる里の土橋に黑蛇の目一つ

△恃む勿れ

長崎　南山

世に我を助くるものなし神佛を恃む勿れ人を恃む勿れ土地金錢を恃む勿れ明日を恃む勿れ己れを助けんとならば宜しく自動自活すべし

△噫！

阿波國　阿部泣波

月下に聖書を捧げて愛の福音を說く外國紳士を圍んで我も人も漫に天國を想ふ時忽ち怪叫あり愕きみると父子らしい乞食二人が飯一椀を挾んで大爭鬪ぶつ喚く椀が飛ふ群衆は散る嗤ふ外人は啞然僕は泣きたくなつた

▲棄鐘

周防　世耳六郎

振り上げた徑一尺の鐘でも重さはある僕はたち〳〵となつて足元の土筆はほつきと折れる罪の鐘！何處ともなく物は叫んだ然り罪の鐘！應へてどつと谷底へ……ごーんと名殘の一聲……僕は思はずわつと泣いたのである

▲怪光

青森　岸綠也

怒る濤狂ふ風もつれ合うて蘇又蘇黑色暗色紫色灰色亂れ亂れて轉た慘憺正に之れ天神と海神と利劍を揮つての大格鬪忽ち怪光あり斜めに天を裂いて青く海を斬り千萬の魔を捲くと見る間に忽ち滅

▲雨と女

新潟　わかば

春雨は艶ぽくて上方の遊女の如く夏の雨は其昔深川藝者の如く秋の雨は空閨に泣く薄命佳人の如く冬の雨は品格ある良家の內儀か

▲天然と愛

德島市　高屋蔦葉

津田灣頭、海暮水涯を逍遙す、夕陽既に西山に沈み昔光數點大空に輝く、而して海潮滔々として矢の如く流る

▲春の小川

名古屋　岡田紅村

音無河畔の柳に春漸く深からんとして吹く風は袂にぬるみ心自ら閑なり日麗らゝかにして舟師の筏を操つる處堤上桃李あり美裝して溫き春を飾る流れ急にして舟師の影已に遠く只香ほれる風に漂ふ節面白き舟歌の一節二節

▲破三味線

大阪　居殷處

月も凍る深夜に音惡しき破三味と甲走る幼女が聲、人家に立て廻らぬ舌に流行歌の一節二節、幼女は寒に慄へど連れ行く親は行止るを叱つ、哀に思ふ人の袖に乞ふとは憎きが上にあな憎し

▲菫の愁

弘前　新屋佐川

蒼窮きらめく小さき星の化身が清く咲き出でし白菫の花よ汝にも包る愁あるか語れと云へば優しき聲に愁を含みて答ふらくそは美を解せぬ牛馬と戀に惱める乙女が情人に贈る花束の犧牲とにて束の間も安からずと

▲三月節句

下谷　瀬川かほる

けふうらゝかなるよき日いてきて、桃の花紅に勾ふ朝のまより、これかれひるのいそぎにとりかさねて、日ひと日友どちつどひて、夜は雛の殿に大御油まゐらするなどぞかきりなくたのしきこととは覺えしか

▲清ちやん

長野　飯田芳風

リボン風に吹せて小川邊を唱歌謠ひ來る清ちやんの美しさ『姉さんあの花取て頂戴よ』細き清き指もて示す姿の優しさ示す花のそれよりも『今取て上げるよゝーラ』嬉しの波はゑくぼに漂うてほゝ笑ひ口の愛らしさ

▲山中所感

群馬　小暮高三郎

惠方詣とて盛裝の男女一心に家運長久を祈れる祠と一谷を隔てゝ亂髪蓬頭の老婆と小女一心に露命を維かん爲め葛根を堀るが見ゆ世は頓て一回轉せざる可らず

▲君莫笑

長崎市　永松流々

醉臥沙場君莫笑古來征戰幾人回、暮色蒼然たる海岸通、あの燈が明朝乘る御用船だと呟いたのは防寒布の一兵士其の儘何處へか歩を移し去つたのである

京都市　紀井賀三郎

▲野火

殘照既に消えて新月微に鐘聲陰に渡りて遠山渺たり鎭守の森は雲の如く桂堤は龍に似たり翠郊一望逕々として朧に村家を點ずる所紅霞の昇るを見る嶌々として天女の舞ふが如し隔らざりき之れ野火ならんとは

東京　木村嶺月

▲ランプの詞

汝の油盡くる時汝の光り滅す汝の光り滅する時汝の油盡く汝の油盡ざれば吾に光り來らず汝の光り滅せざれば吾に光り輝かず吾人は唯汝の油を盡さん事に勉めん

陸中　安部鷗渚

▲果敢なの戀

菫咲く堤八丁春風ゆるう吹き過ぐるに羽もかろげに飛びつがふ黄白の蝶その間

を蝶や菫には目もくれずしてうづむきがちに逍然と辿り行く村の乙女今町に行きて見て來たる芝居の顔揃ひ知らずその胸にゑがける果敢なる戀や

薔北　紀室靜雪

▲玄海の殘月

鏡の樣な玄海洋に空一杯露れ渡つた月普く宇宙を蘇し今や東の空は五色をぼかした如くほのぼのと明けて水天に連り遙に聞ゆるは波か風か自然の神の蓋音機か月は白けて笑ひ飽きたやうである……

大阪府　田中俊子

▲寢顔

乳にや腹は滿ちけん幼子は眠れり圓らなる雙の眼はとぢられて紅の唇よりは靜かなる寢息もれつゝジッと見入りし若き母の兩頰サッと薄紅葉散るよと見ればよく似てるわねゑとにッこり窓の緋桃に春ふかし

近江國　小四菊之助

▲戰場

民家は兵燹にかゝりて殘煙蕭々田畦は卒脚馬蹄に蹂躙せられて秋の稔り覺束な

く野狗家雞の吠鳴は急霰遠雷の間に聞えて物凄く風腥く吹く殘月の前銃に倚りて縋起し傷卒の痩影哀れ悄然たり

長崎縣　江口敬六

▲霧のよふな雨

樹の芽流しにや霧のような雨は朝から降るので僕も小窓から顔まるだして眺むると門さきの小川にそふた柳は今が榮りとはゆかねどほんのりと出した芽を心地よげに濡れてゐるので思はず一句を、書にあらて柳に煙る春の雨

伊勢國　中村平治郎

▲路傍の筍

路傍の筍は唯も折りたき心地する其處へ足を止めた彼は一寸後を見たが又前後を又も見て遂に折つたが急に歩み出す時に見上げられた屋根の上の我の見ぬ振すると共に彼は急いで道を折れた跡に筍は捨てゝ在つた

愛知縣　稲垣國太郎

▲墓畔の夕

夕榮の空麗しき夕、寺の鐘の音をたよりに深き森の奥なる弟の奥津城に詣でぬ

古からねど早や香の煙に煤けぬ、竹の花筒水涸れて手向の花は彼が短き生涯を語るが如し叢にすだく虫の聲夕風吹いて訪づるものは落葉哉

静岡縣　横山藤七

▲磯の夕日

余は孤影飄然として汐の香高き巖頭に佇めり今し沈まんとする夕日は殘礁の一角に掛り時金波之れを洗ひ黒岩忽ち鍍金せられし如く燦としてきらめくあな惜しや此の美觀暫時にして消えぬ折しも巖下に千鳥一聲日は西に落つ

豐後國　菅原兎爻

▲田舍の初春

寒風吹きすさぶ百家の村綠麥漸々たる千頃の田凧揚に空脱む見童軍鞠つきにきほふ少女隊紅舌白唇嫣然たる梅が枝に金衣の公子先づ初春の福音を傳ふものかじゝ春衣飾りて往來する畔路おめでたうの交換一幅田舍の春景！

山崎貞

▲島原小地獄

小濱村溫泉を下る事數丁にして沸々の音蠱立の烟は一見して溫水噴出の源なる

を知る之を名づけて地獄と云ふ其の理由は知らず左れば余は只其の噴勢の激迅なると熱度の猛烈なるを賞するのみ

茨城縣　横山房吉

▲横町

星稀に北風肌を刺す夕年頃七ッ位の乙女身には襤褸を纏ひ手には汚き古カバンを持ち細く寒き聲を張り上げて『花の便り戀の辻占！』アヽ只さへ物凄き横町此可憐なる乙女によりて猶一層の凄みを加へた

常陸　海老澤宣

▲引いて居る

お憐の神さんは長煙管に煙草を輪に吹いて長裾をずる〳〵と引きずつて居る裏の噂は朝から晩まで金棒を引いて居るお向ふの妻君は日がな一日三味線を彈いて居る無妻の俺は襤褸を引いて居る

函館　據谷春舟

▲天祐

雨を含んだ薄黒い雲は失の如く流れ空を呑ん計りに逆巻く浪は露艦の彈丸が命

中したる奈古浦丸を地獄の底深く葬りつゝ有るのだ嗟悲慘なる哉此光景我全勝丸員は悚然として死を決した俄然急雨霧の如く一間先も辨ぜぬ天祐

熊本縣　大林宗嗣

▲社會主義

非常を報ずる警鐘の亂打深夜寂寞を破つて凄じく黒煙白煙逆巻く空に獨ほ築く大廈氣樓瞬きもあらせず呑み盡す金殿玉樓！月影暗き森の下火の手を仰ぐ凄顏三ッあゝ是て癪の蟲が收つたわい

京都府　山澄翠

▲田舍の春夕

春風吹きて麥の芽のび錦織るてふ畔道を鍬持つ人の歸りくれば今まで騷しかりし群雀の聲も聞えず處々の藥屋よりうす煙立ち昇れば山寺の鐘二つ三つ四つ

宇都宮市　生井整是

▲懷舊

吾れ他郷に在ると茲に一年然かも今の身や幸薄し風の朝雨の夕去りし昔の平和なる夢の跡を一小日記帳の上に偲びては小學時代を戀ふるの情轉た切なり姉上

は既に嫁かれぬ弟は茨城に吾は此所に哀れ故園の紅梅花今如何に

群馬縣　田中辰雄

▲春來れり

江南の一枝ほころび金衣公子の一聲春を報ずれば門田のしらゆき漸くに消え鏡の如くなる池面の氷解け春柳をくしけづる風春川をながるる水また舊態にあらず吾々少年が大に活動すべき時はまさに來れり

岐阜　熊澤惠助

▲壹岐島

夕日靜かに波間に消えんとしてうら枯の山野いたく荒れ小川の邊りに死躰の横りて水鳥一羽立ち上りしに見る人もなし只彼方の兵營に〇〇旗下して三段色の露國旗立つるを急ぐ一群の兵有るのみ

千葉　山本光英

▲火花を見る

梅の花は盛りであるやがて櫻の花もさく頃になる同胞は早や今艦の中で火花を見て愉快の事と思ふ見飽きて跡は招魂祉殿の内で靜に眞の花盛りを見る神と成

るものもあらう

名古屋　筒井銀峰

▲滿足

一畝に足らぬ田、日出づれば耕し日入れば即ち鍬を肩に、狹けれど穢けれど濁酒を整へて待つ妻ある山下の茅家にと急ぐのである世の富も譽も尙妻が酌の濁酒一壺に及ばざる遠し

日本橋區　松下一瓦

▲宗教の利益

宗教には物質的の利益なし吾人が信教に由りて得るは常に精神的利益のみ彼の信教の德によりて物質的利益を得んとするは迷の甚だしきものといふべし

岐阜縣　田邊敬

▲日記　二月廿一日

藁拵への裝尺餘の雪を踏み分けて谷間川原の石拾ひ先十個を得之を背負ひて某工場に收む二個は十五貫未滿にて除けられぬ此日賃金白銅四個今夜鎭守の祠の戰勝祈禱に詣づ談軍資獻納に及ぶ余は既往五日に得たる賃金を捧ぐ

▲天つ乙女

佐世保　蒲原佐六

溫み行く水面の氷解け去りてしめ〳〵と降る春雨には佐保姫の羽衣如何に濡れつらん野に山に將た塘に芽出し若草の綠の褥敷きつるはそも誰をか待つ日麗かに春風戰ぐ長堤に鶯の如き聲もて唱歌するはあな誰にやあらん

▲戰士の裏面

山城國　井上霞山

軍の門出に「妾も女乍ら御留居中否不幸敵彈に仆れ給ふも見事此子を育て申さむ只御身は大君の爲に而已……」と惜別の言葉に勇み出で征し行く夫の影に焦れ停む妻人の袖を潤す名殘の涙二ッ三ッ噫！そか人の心こそ

▲不知火

福岡縣　藤本兼吉

沖邊の不知火かき消えてせめて名殘か一點二點磯の岩影にほの見えしも今は全く消え失せぬと思ふ瞬間恐ろしき一陣の魔風天外より落ちて波を怒らせ岩にむせびて怪聲!!磯の松が枝一齊にそよぎみ空暗憺星影凄し

▲梅枝

伯耆　椿英峰

鬢のほつれ毛かき上げて熱涙一滴靜清たる眼に浮べ長閉けき春風に今にも咲かんとす梅の枝五六本肩に賣り歩く一人の乙女受くべき代價僅かに七八錢病める母親の壜の物とす志や梅の高き香も及ばざるべく花の清の比ならじ

▲悲哀

備中　佐藤峠朗

年若き軍人の未亡人其手枕に眠る片見の小兒を暫し見とれてありしが覺えじ生き寫しとつぶやき眼には早や一ッぱいの涙を湛へさめ〳〵と泣きくづれぬ折しも戸を漏れくる哀雁二聲三聲物哀れなり

▲月と山

陸奥　近藤南嶽

雄圖一度蹉跌して故山に起臥せんとす回顧せば十年の昔晨夕夢を同せし竹馬の友有爲轉變何ぞ定め無き仰見る皎月古の如く山嶽依然たり釋然として大悟す吾堅牢の意志眞如の靈心なきなりと煩惱を拂うて豁然志を翻しぬ

▲雪後夕影

三河國　廣田　清

玉霰はら〳〵と折ふし雪の交りたるが何時しか妙に變り行きて眞綿花か木綿花か白花の積りきや銀世界幼兒の騷がしく寒き冷き夕日は漏れてやゝ暫し見入るゝ翁、羽衣の袖輕やかに舞ふて去りしは雀なりしか

▲訣別

加賀　野澤秋圃

妻は只一語「何卒お達者で」と後は情迫つて涙潸然傍から四五歳の小兒「お父樣首幾つも斬つてお歸り」と健氣な詞乳呑む稚兒は覗く父に只一微笑嗟これ出征の人を乘せ今徐に動き出す滊車を追ひながらの訣別

▲玉の緒

京都　三好旭仙

玉の緒よ絶えなば絶ね絶ゆるとも君の御爲國の爲別ては盡さん法の爲噫我佛敎の近狀よ寺は荒果て僧なきか僧は數多ありつれと法說く者の少きを噫此身を御佛に捧げまつれる上はよしや其玉の緒の絶ゆるとも

▲田舍娘

丹後　藤野白扇

赤き襟に袖口高くかゝげたる姿の飾なきが云ひ知れぬ愛嬌を浮べ天眞を流露して宛然天使を髣髴せしめ無我の界に恍惚たらしむるもの田舍娘の他に超越する自然的特色にあらずや

▲アッキス

相州　末吉一柏

禁煙してから今日て三日目此間の辛棒中々辛く吸ひたくなると茶を飲んて我慢した所が三日目は難關であつた外出すべく纏ふた外套の衣嚢に一箱のシガレット已に打捨つるの勇氣は失せて口には一本のアッキス

▲梅日記

姫路　大林露村

二月十五日白國の梅林に行く蕾のみにて寒し十七日同窓輩の運座に梅十句をつくる十八日食堂に小使梅の小鉢を持ち來る廿三日また白國に行く早咲きあちこちに見ゆ米國人犬を連れて通る

熊本　久野いと

▲鶯

宿の梅は今盛なるになど鶯は音づれざる梅が香は傳へてあらむに聞えよがしによそになく鶯の心こそいぶかしけれ

靜岡　大石靜南

▲試驗場

今日此室に充滿せる受驗者の中に坊樣育ちの自轉車などで學校に通ひし者はあろう雪降る夜半も厭はずに棍棒を握て苦學せし者もあらう知らず聖なる神は如何なる判決を與ふるか

美作　下重益治

▲起てよ大丈夫

迅雷烈風起るよと見れば東洋の潮流逆卷きぬやがて怒れる鯨鯢の吹息も空に血と湧きて潮の八百會水煙割れて碎け裂けて散り平和の光影暗し月雪花は昔ごと臥薪嘗膽腕をより臍を固めて劍抜き雄たけびしつゝ起てよ大丈夫

下總　長谷川松雲

▲鳥の戀

雪の朝雨の夕あるは塒に音信るる風の無情に泣き千聲叫びて血を吐くとも終に戀人は來らず噫うたてきは今の身よ浮世の戀を知り初めてより儘ならぬてふ波濤を越えて得たるはなにぞ戀ならて涙なり實に戀に泣く血の泪なり

長門　山本實明

▲櫻の君

墨堤芳山の景はなけれど十數年來我が唯一の友として狹き庭に横れる櫻の君、花の下青葉の蔭はいはずもあれ月の夜雪の朝我は如何ばかり君の情に感じたりけるよ仰き願はくは長へに我友となりてよあはれ櫻の君

栃木縣　谷弘

▲磯の別

金波銀波碎け寄する磯邊潮風徐ろに吹き來る所沖に小蒸滊一隻朝日は輝き初めぬ「勝ちやんそれては御別れいたします噫別れほど……」聲は續かず友は苦悶に震ひぬ二人無言握りつめし手は容易に放れず

▲須磨の濱

兵庫　秋操　朝

「アーレ西は追分東は關所よいしよよいしよきいきい」何んと云ふ趣深いとてあろう麗かに晴れた海に紀の山々を雲の中に眺め淡路島を目の前に眺めながら今自分は清らかな汚れのない砂の上に横つてゐる

▲月夜

伊勢　毛利松琴

今宵十五夜の月列なる雁三羽と星一つとその側に在り野徑に童の唄聲凉しく牛牽き歸るを待てる里の母親面影いとさへ〳〵し東がた童の射影は遠く母にまで及ぶ街の孤燈白く照りて畔傍の野菊さまに笑を含む

▲我が郷

岩手縣　佐々木太兵衛

千山萬岳聳え激流奔湍石に隨つて曲折を爲すの邊三々伍々部落を成せる我が郷にも文明の潮流は腐敗分子を先鋒として襲ひ來り大古醇朴の遺風は深き迷霧を後援として對抗す只依然舊に變らざるは秀靈の山河あるのみ

▲ゆげ

豐後　平山紫泉

げに心苦しきものは湯屋の湯氣なるよ燈火朧ろなるまで立籠めたる中を數多の人のがやがやと立込みすれあふぞ胸苦しき事にこそされど夜もはや更けてもの靜まりし折屋根より立昇る湯氣の有明の月を後にしたるはうれし

▲春

新潟縣　内藤鎭筵

彩霞鬟鬟として晨露燦々胡蝶翩々として薫風習々柳條裊々趙飛燕梅花嬋妍楊太眞黄鳥は飛び去り又飛び來つて嬌音珠を轉ずるに似たり瑤琴一曲彈ずるに懶し半卷の西廂睡を忍びて看る東君分付す前宵の雨嗔起す芳魂粧點の春

▲五色塚

福岡縣　印南圭三

鎌倉公の奥殿入定まりし眞夜中に何事ぞ右手に匕首閃かし御寢所近く忍べる女性近臣海野小次郎が手に搦められ由井が濱邊の露と消え身首五ヶ所の五色塚主はこれ義仲の勇將樋口次郎兼光が妻韓糸

▲佛耶儒三教

羽後　館山祐治

佛耶儒三教の各特質を一言にて云へは佛教は理性的智力的哲學的眞的なり基督教は直覺的感情的文學的美的なり儒教は常識的意志的倫理的善的なりこの故に吾人の理想的將來の宗教は是等三教の融合調和したる所にありとす

▲青年と信任

日本橋　加納和三郎

汝等は信任を貴尚するや然らば喫煙を廢せよ飲酒を廢せよ而して支出を收入より減ぜよ須く假面を脱却して眞卒なれ人を欺瞞して信任を享受せんと欲するは斷じて不可なり沈思默考して幸に諒會せば先づ前述の二者を捨てよ

▲人を知る方法

大分　南波五月

昔は人を知るに余程困難なりしも今は中々に易し其の方法は先づ何人に限らず金若干を進呈せよ若し其の金を受けざる者あらば其人は非常の大馬鹿者なりと知れ

▲いさゝ川

京橋區　富士本青楓

春の朝まだ消えやらぬ霞より出て霞に終る小川そが水面かすけく低頭れし汀の菫一輪間々吹く微風に下行く清水に華顏を濕せはキッスされたる小女の恥らふに似て而も水の面の渦卷は佐保姫の笑くぼにさも似たる哉

▲讃美歌

長野縣　佐伯一驗

新舊思想の激しい爭いに疲れた我れは夕日を脊に池を遶つて居るふと見つめる池の面に新星一つ神秘な目指(まなざし)は余を諭す樣遙に聞ゆる讃美歌余は神の福音を耳にしたかの樣立ち止まつた仰く空の一方には何物か余を招く影朧

▲炭燒

山形縣　清野三樹

山奥の炭燒男黑き顏に破布子なに樂しきと問ふ勿れ顏こそ黑けれ心は深山の雪の色食は額に汗して得衣こそ粗なれ妻が誠心の針暖く木を切りながら鄙歌謳へは鳥に松風調合せ觀る月花に色氣なくいとも平和に世を送る

▲靈美

羽後　大川飯鮭

幼時は濃彩を喜び長ずるに從ひて淡彩を好む濃彩は凡俗淡彩は超凡縱令俗人の眼を眩せしむるも哲人より見る時は穢土哲人の手になりしものは俗眼より見れば美ならざるも美以上の美あり

▲秋の蟲

德島縣　田村花月

庭の黃菊もいろあせて胡蝶もいまは夢こほり翅おとろふそのすがたやさしのもかげたえてなく小萩が袖にとりすがり啼く音あはれに秋の蟲

▲學校戻りの坊

滋賀　大西孤月

お母さん日本が……門口より叫んだ坊は母の顏を見るや只今と云直し露國の軍艦をヅトーンと擊ち沈めたお父さんが擊たに違ない万歲々々と聲勇ましく又出て行、坊の後姿を見て母はニッコと笑みぬ

▲老媼

豐前　林雨太

予が村に一老媼あり曾て附近の鐵道線路にて其一人息誤て轢死す恨骨髓に徹し爾來十有餘年瀛車に乘れる事なし常に曰く吾れ死すとも汽車に乘るまじと彼にとりては瀛車は全く不必要のものたるなり

▲軍人の意氣

肥後　宮崎武之

密柑(三韓)一籠饅頭(滿州)一箱御笑味あれと一軍人送る其の意氣やすでに滿州朝鮮をのむ快哉快哉ウラルを越えモスコーセントピータスブルクを陷れロシアの亡びる嗚呼幾日の後ぞ

▲初雪

越後　廣川治一郎

片しきわびぬる一夜とこふく風も寒けき犬のなき音に夢さむれば、しらゆき二つ三つもれ來ぬいぶかしければ外見けるに、いつか山里白いと白う賤が伏屋も玉の臺とぞ化しつらゝは水晶簾とぞ垂るゝあゝ雪こそ降りけれ

▲偶感

山形縣　柴田吉治

六花紛々茅舍炭なく肌膚粟を生ず嗚呼豪慾非道の人鬼に家財は奪はれて哀れ身に纒ふは襤褸のみ見は飢に泣き情止み難く釜を負て近き質屋に到る思の外なる哉彼の懇懃なる應對には余の心は伸びて見の笑顔を見る事を得たり

▲軍資獻納

野口早苗

壹錢銅貨貳錢銅貨果ては文錢取り交ぜて金壹圓細る燈火の下に數へ擧げた少女と老母朝報社の受附に來た奉公萬分の一端恤兵部へ獻納の御頼み是れを無言に受取つた記者歸る後影を見て眞の涙の伏する所と獨語した

▲軍人の妻

島根縣　稲田如心

夜は三更を告げしも寢も得ず戰地の夫に心を碎く折、惶しき電報は夫の戰死、心神を失て恍惚たり、是ではならぬと綠の黑髪根元よりフツツリ、父の前に落着き拂ひ夫は名譽の戰死を遂げましたと、涙一滴

▲慈善家

長崎　隈部岩山

近村一の富豪と呼るゝ辛さ、義損寄附、他に超えざれば笑を招く我身の位置、可惜劍の山を登らずば得ざる賓を、義理ある浮世は嫌、然らば山に入んか、寐せ金は大の禁物、新聞紙の能く譽る慈善家、錦も裏より見れば

▲無情の風

茨城　小松崎敏

寒月高く風荒む夕電報を握りし父母の驚は奈何吁可憐の少女彼は其女學校生にて品行正く成蹟亦優れけり然も怖るべき腦病は突然彼を斃しぬ惜む可き嵐なる哉花の蕾を吹き落すとは猶ほ天地情有りと云ふ耶噫可憐の小女噫

▲愛と情

本郷區　久山紫水

川風寒き水道橋を彼方より來れる媼の脊負ひし可愛の孫か冠らしゝ毛糸編の稚頭巾あはれ一陣の嵐に舞ふておちぬ驚く媼の周章てゝ拾ひ上げし予が夢暖き脊中の主に屆け參らしゝ時の悅び顏見るから何となく嬉しかりき

▲巖上松

越後國　大塚迦釣

動かさるを表して苔結び、變らさるを意味して枝奇し、巖上の松瑞祥既に此の如きに、初日影晴れて光明正大の下、み年を祝ぐ若雪粉彩の景色は、これ天特に靈鶴を降して此馬拉亜の絶頂を占め、万代不搖の翼を張る者か。

▲我屈理屈

東京　穂半迂人

人生は「事實」已。時と處と此裡に標準す。逝く者訪はず、動く者互に親疎し趣味する已。眞善美は唯一向上の階梯也。唯「事實」に於て食衣住を統ぶる他「呼さあひ」を生命とす。「さあひ」敏活復雜高潔につれ、人の價値增大す。

▲無邪氣なる少年

服部達治

余日外學の庭より歸りし途にて隣童五六人顏を熱し鬪ひ合へり余近附て其惡しさを懲諭せしに輒に爭意を消失し親むこと舊の如し嗚呼無邪氣なる哉常に怒る父の顏を柔げ憂る母の心を喜はしむるはげにさるとぞかし

▲日章旗

南總　富永露峯

赤なす圓心、無垢なる白地、支ふるに金玉を戴ける黑色の柱あり、是れ我國代表者たる日章旗也。世界萬民の戴く天壤無窮の日を我國旗に象る壯なる哉。

▲青春夢

丹後　八畑朝風

三更月下の琴聲に和してこぼれ初ぬる涙！露の玉か戀か情かわづかに洩れ出づる柴垣聲に恥しさも知りぬかねて天地を惡魔の巢窟と見て悶えし我が一點光ほのかに見えて三寸の胸に悠久の雲を宿しぬ罪か？迷か？

▲夕暮

空峰

明神の森の雲を凌ぐ一本の老檜に塒を急ぐ群鳥翅も重く低う飛び雲は次第に消え初め、乳を求めて泣く兒の聲かなしく何處よりか遠く近く寂滅爲樂と入相の鐘の音微かに聞え四邊ば朧ろに暮れ行く山里の夕暮ぞ淋しける

▲氷の朝

失名

手水鉢の水ありたけ氷り、竿の手拭昆布の如く軒の氷柱、葉闌が下の銀の小石、薔薇、山茶花、南天の赤み、さては戸外の轍の音、下駄の響も冴ゑ渡り筆硯まで用たゝざれば、歌の心も氷りけらし

▲粗衣美食説

田村亜子

古人曰く、粗衣粗食美德なりと、然れども、吾人は粗衣美食を以て最美德とするものなり、美食とは何ぞ敢て贅澤物を食するに非ず、滋養物を食するの謂なり、粗食以て此繁雜なる社會に大に活動し得らるゝや？

▲坊の夢

花園　木宮小蝶

お母さんあの昨夜お父さんが赤髯の首を提げて坊に云つたよ早く大きくなつて兵隊になれつて坊もお父さんの樣になりたいな、坊や夢てお父さんがそう云つたの、其翌日坊の父は旅順で戰死をしたと云ふ電報が來た

▲春の夕暮

大隅　森本無骨

鎮守の森の櫻花の眺めに日は暮れて入相告ぐる山寺の鐘のひゞきの聞ゆるは最もあはれに思はるなり吹きくる春風に雪かとばかり袖に散る何れかあはれ山里の吾れはつれなく思へども主こそ吾れをなげくらんあゝ吾の身や

▲梅の夕ぐれ

埼玉縣　齊藤林作

日は既に入りて幽香馥郁とかほる梅の梢には早や三日四日の海き絹張の月のかゝり見えるとき白梅里より歸る馬子の駒の足音のいと調子よく聞ゆをり〳〵いと清げなる唐詩を歌ふ聲かすかに聞えたが月も夜の幕に隱れ入りぬ

▲良教師難

肥前　岡野みち彦

在職十年優柔姑息成蹟の毫も觀るべきなし然れども溫順の二字は能く良教員たるの人望に稱ふ、新任半藏活潑有爲、面目頓に擧かると雖も剛直常に人に嫌はる、曰く是れ教育者たるに似合しからずと

▲以心傳心

岩代　白井彌作

平常は祖母にのみ纏附いて我れに振向もしない今年二つの露子、恰度余が充員令に接して出發する朝であつた、彼れはオトッチャンを連呼して後に廻り前に進み何か物言はむ樣子である、父の生別を悲んだのであつたらうか

▲あはれ春の一夜

牧野栗山

彼方の峯に昇れる朦朧たる半月、白烟の内に囁ける小川、幽に長く立てる老松、さては鍛の中の水の車音も今は盡く悲愁の片見、殊に向ふの糸を垂れたる柳の下に二つの木の株、あはれなつかしき妻の姿は今や何所

▲あゝ美觀

紅村

尾久の渡しをすこし上つた荒川の曲り角で、春の靜かな夕日の傾くのを見てゐると、白帆か右手から現はれ艪の音がギーッとなる。河向の立木からさされた日がパッとまともに輝いて、小波をキラ〳〵てらしてゐる

▲露の命

兵庫　山本潤三

探海燈の光に半ばは消て、餘露尙滿野の草木に刀をひらめかせり、知らず、天陽日々に送る錦の御旗は何萬ぞ嗚呼一度び御旗の翻れば其光に照らされて、とけて流るゝ露の命ぞ哀れなる

▲囈語錄

大分縣　李月

友曰く『隨て得てば從て散ずるは吾本領也淸貧の樂みは君少しく語るに足らんか』と余答て曰く『得るに隨て散ずるは足下の本領とや吾與らず散ずるに隨て得る耳』某氏側に在りて笑て曰く誰か烏の雌雄を知らむ

▲夜

東京　遠藤瓦子

あゝしづけき夜なるかな更け行く空に霧立ちこめて朦朧たり宵までは皎々たりし星も今は暗く山野の草木皆闇に包まれて天地は眠りて音もなし夢は何處をたどるなん實にさびしの夜や

▲亡友のうつしゑ

足尾霧村

オーこの微笑める唇物言ひ給へや嘗て沮喪せる我精神を慰めくれしこの唇世にありし時と露變らぬ此面影せめて一言なりとも……まこと死をも誓ひし我友浮世に獨り吾を殘して哀れとは覺し給はぬかオー微笑めるこの寫眞よ

▲養氣の好處

近江安井默軒

高山の絶巓徐に天風に嘯き雲霧を呑吐しつゝ遠く眼を下界に放つの時、點々として、奴豆腐の如きは彼の金殿玉樓か、蠢々として、蛆蟲の如きは、その錦衣玉食の人か、嗚呼大丈夫氣を養ふ須らく這般屈竟の好處を閑却せざれ

▲正義の戰

栃木縣　小林六三郎

今や陣雲東洋の天を蔽ふて勢恰も潮の泡立つ如く正義の聲鳴り響きて將さに際てなき滿州の積雪は彼の貪慾飽く事を知らざる血汐を以て紅に染め盡さんとす嗚呼壯快なる哉此の戰は洵に國威發展の上に於て千載の一遇たり

▲不遇と災難

栃木縣　豐田辰亟郎

不遇と災難とは男子の膽力鍛錬する機會たり男子は一たび死生の間に往來して始めて人生の眞趣味を解す故に之れが爲めに挫折することなく益々勇氣を鼓して後理想の實現するあるのみ月に虧盈あり人豈に盛衰を免れんや

▲感慨

栃木縣　井上德平

徐ろ我身の忍ばれて袖に涙の露繁く身顧もせず佇めば足元なる一疋の蟋蟀が歌ひ初むれば續々と鳴き出す虫に萩の下露夜は荒れて葎の宿に秋淋し心の駒の轡虫は狂ふが如く劇しく鳴き涙の雨になり出しし鈴虫の聲さへ聞えぬ

▲運命

野州　牛田映月

人に運命あることは猶ほ農作の秋時に於けるがごとし、天候一度常を失すると きは、春來よりの勢力をして悉く水泡に歸せしめん、しかれども種を蒔かずして實を得んとするが如きは誤れり唯智力の限り勤めて、運命を待つべきかな

▲落花

栃木縣　山村一男

朝より書齋にこもりし余は痩脚の力試みんと詩集を手にして舊道を行く時、伐らるゝとも知らで櫻の梢に遊びつかれし蝶々の羽を休めて眠り居りしが斧の音に驚きて舞ひ行くに、花も心ありてかちら〳〵とその方へ散りゆきぬ。

▲愁思

山梨　下里四溪

日は西嶺に沈み月は東垣に浮ぶ、風颯々として老松影淋し、吾が心隱として穩かならず、去つて青空を望み長息すれば、愁思形なくして雲の如く湧き、拂はんとすれば愈鬱り、夜色凄々、万籟寥々、數行の過雁、鳴く聲高し

▲梅の音づれ

大阪市　楠桂水

お訊ねの津守の梅は、そよ〳〵と吹く春風に誘はれて、二三輪綻び初めました。君よ、明後日の日曜日には、風舟兄も來ると云ふから、貴兄も我が草庵を叩き給へ。詩でも怒鳴つて、大いに愉快を極めやうぢや無いか。

▲山中の美人

福岡縣　矢野眞人

白雲峯を鎖して咫尺を辨せず山嵐一嘯老檜の梢を鳴らして點滴バラバラと帽廂を打つ、細徑險惡にして迚るに難く躊躇洋枝を横へて麓を顧望すれば驚ぐ可し婀娜たる一美人の疾走して來るを見るあゝ彼れ狐狸に非ずして何

▲無邪氣なる小供

豐後　吉田・耳一

御父ちやんがね戰に行つて大將の首取つて坊と姉樣と御母樣とに一つづゝくれるッて坊うれしいの大きく成つたら坊も戰に行くのねー御母樣と片言混りに悅ぶ樣に思はずほゝ後は一雫ほろり、をや御母樣眼が惡いの

▲己は奈何

肥前　早田伊三

彼は意志弱し。腰拔也。焉ぞ世路の艱難に耐へんや、と。得意顏に人を罵りつゝ、畑草を喫する御身の意志は如何にぞや。

▲朝日の出ぬ前の事

香川縣　福家秀嶽

噫文明なる哉!?二十世紀、噫基督教なる哉!?愛、噫露國なる哉!?露國。文明と愛との粹は凝りてブラゴヘスチンスク事件となりキシネフ事件等となる希臘教の國ザール領土文明?愛?旁礴馥郁たり。これも朝日の出てぬ前の事

▲春の神に

紀伊　松原白羽

來れ不思議の客よ、平和なる天に來れ、汝が來るを幾億の人は喜び迎ふるぞ。汝心あらば此長閑なる春をして今少しく延長せよ、汝が一度此溫き空に來りし時より嗚呼幾多の帝國は富み榮へし。

▲不得一句

横濱　田中節堂

窓前一株の梅開花五六分黃昏の月斜に枝間に在り此時此景人をして幽情禁ぜざらしむ凝思多時疎影暗香氷肌玉骨皆是れ陳の又陳乃ち一大白を引き笑て曰く古人已に吾言はんと欲する所を言へりと終に一句を得ず月日某記す

▲進歩の今日

蓮田末彦

人類の往來を隔絶したる大洋も文化進歩の今日激浪怒濤に大艦を連ね航行す天險依然として其舊觀を改めざるも今や日露戰爭開始す豈又偉大ならずや、古人の禍福は絢へる繩の如しと云ふも眞に然り

▲霞浦の曉

勝山清五郎

東天紅雲を漲らし霞は淡く紫帶ふる筑波嶺より長汀の漁村靉靆さ一面宛然水銀を塗布せる如く清澄たる湖に一道燦たる金粉を流せるを赫たる朝暾の光錦上花とや云はん白帆一點玉の如し

▲珊瑚船

雲羽

海霞全く散じて、旭光幾万條の金線を斜に注下する頃、滿艦飾を裝ふた珊瑚船が、出港を祝ふ長閑な船歌と共に徐々と進行する狀、夫に向つて日光の紅金色と、海氷の深碧色とか彩色を施さうとして居る狀、是れや自然美。

▲月

水下三瓦

嗤萬古の老翁よ汝は吾等が遼遠なりと云ふ埃及の昔も三皇の歴史も知る其間吾等の子孫をして「月みれば千々に物こそ悲しけれ」と泣かせんとす抑汝は人を愁殺する幾人にて足るか

▲雪

横濱　孤峯

往年佳人をして宮中の簾を捲かしめし優美の雪よ、豊年の貢と稱せられ、月花と共に共に愛でらるゝに降れよふれ、さはれ茅屋に寒に泣く者の苦を思はゞ、哀の人の上になふり、汝は榊拾ひの古句を思ひ出す

▲梅

信濃　倉田一貫

梅香馥郁鼻を撲つ樹の槎枒たるは氣骨に似寒威に凋まざるは堅忍の志に似たり其白きは潔白を顯はし香は芳名に譬ふべし而して其五辨の五常に像るか梅に問ふに答へず記して人に問ふ

▲約束

大阪　水守郊村

皆々様壯健ですか、御尋ね致します、いよ〳〵日露砲火を交へたてはありせんか、しかも太勝利です、さあ早く靴を買つて下さい父上様はとう〳〵負けましたね、五月過ぎならては戰が始まらぬなんて。

▲あはれの子

埼玉縣　中山秀道

腕車、自轉車のすぎさりしあと、歳若き男女のささやき合ひて、歩む行手に、這ひ出でしは、八歳許の女子にて「旦那様どーぞやゝ慈悲に難義の者へ」と貧の教へし、物貰の言葉しほらしう餓と寒さにて、聲までやせたり。

▲春を送る辭

名古屋　藤田寛

今春已に暮れんとす、試に筇を溪水潺々鳥語と和する處、芳樹の下に曳けば、光風枝端に起りて、花冠片々水波に點じ、杳然流れ行くを見む獸句あり落紅一片水は無心に浮べ去る

▲年を越す

群馬縣　和利田穂華

明らけき維新の御世に至りて甲辰の春迄目出度治り來たるは一泉の水大海に流れ入が如し亦仝じ生れの人大臣に上るが如く人間は皆此精神を振ひ起し國の爲君の爲を思ひなば如何なる愚者と雖も善き道を行はざらん者はなし

▲湖畔の夕

滋賀縣　井上水堂

今しも舟を渚に繫ぎし翁は、網と籃とを手にしつゝ、清き白砂を踏んで吾家に入りぬ。夕陽已に比良山に落ちて、蒼茫たる夜色は長汀曲浦を掩へり、かの葦間の漁家よりは、妻の炊ぐにやあらん、夕餉の煙高く昇りぬ。

▲僕の好物

信州　木内藤花

お父さんの好なのはお酒で毎夜一杯づゝをお定りにお母さんの好なのは煙草で一日でもやめては居られないつて僕の好なのは酒や煙草ではなく毎朝お目醒に戴く菓子と軍遊びをする時僕が一番の大將になつて敵を打破るのだ

▲從軍神

奈良縣　喜多宗市郎

臥床歎聲の激大なるを聞き我れ蹶然として之を伺ふ然れども〳〵容貌正に憤懣して戰はしとす時に東天紅々旭日三輪山の萬松を離れ明白とはなせり是れ熊野明神の從軍也

▲山家の生活

茨城縣　加藤芋葉生

雪さら〳〵雨戸汀つ夜。此に焚く柴の暖く繩綜ふ脊子、襤褸さす妹、此處のみには荒き世の木枯も吹かず、平和の神の幸受けて暮らす山家の氣安さよ、如何なれば人の子。虚榮の夢に狂ひ悶ふる、暖き風茲に吹くと知らすや。

▲月

長野縣　野澤紫星

夢覺めて半宵破窓によれば、雲無き空の月一輪すめる光りはいためる吾心深くつきぬ、噫月！などさは汝罪深きや、思へ昔、晁鄕は汝が爲遠き故鄕偲び、菅公は汝故配所に袖しぼりぬるを哀れ、今も汝故泣く者そも幾何。

▲雪

栃木縣　平野清水

雪は霏々として梅花を萎縮せんとするも、梅花は滋に燎亂香氣紛々たり。渺々瀰々たる琵琶湖は歛として大和魂を澣ひ、巍然として雲外に突出せる富嶽は其の勇壯なるを鼓舞せり。何ぞ旺なる、彼の露國亦之を如何にせん。

▲誘引を辭す

常陸　小崎けい子

梅香も啻ならぬ玉章の匂ひに御心添へ鶯の初音にも勝りいと嬉く御伴相願度存侍れど昨日より腹痛烈く醫も兩三日注意せよとの言御好意を空うせんも不本意ながら思ひ止り候拙き筆に御懇情を謝し侍る穴賢

▲落花

栃木縣　生井英俊

母上は例になう歸りの遲きまゝ門の邊りに出でて彼方をながむべく愛らしき妹を背にして椿の下をすぎしに廻らぬ舌にて花を取りてよといふ折りとらんとせしにあはれ唯一輪の早咲きは散りぬ我は泣く兒を慰むるに困じき

▲我の希望

信濃　栗林文夫

金殿玉樓に棲むを望まず錦衣大樓に飽くを希はず九尺二間の片田舍軒傾きし荒ら屋も其日の課業終へし後ち榾火の側にまどゐして家内一同睦ましく浮世話しに夜を更す寒苦も知らぬ溫かなホーム

▲猫

近江　播部山

昨日の雨に白梅一時に蕾含らみ三歩の庭も梅を根にして雲起る日の射る露路の屋根の上に母の愛する小さき白猫耳搔きつゝ首輪の鈴に戯れ居るもいとをかし

▲出郷

土佐　大四鳴川

慈母堂にあり不遇心を傷しめしもの幾年ぞ、况髮髮既に白く此身に待つの情太だ切也、見や何爲ぞ天涯に客たらんとする嗚呼誰と語らむ個中の情、家郷を去らんとするは吾志にあらざる也而も是れ吾志なるを奈何せむ

▲雪

但馬　塚本猛雄

六花繽紛滿目皚々銀砂玉屑ならさるはなし是れ豐年の瑞か騷客には詩歌の料ならんも一天濛々として白花紛々降を止めず積量終に人身を沒する到らば是凶歲の徵か山陰の風致を倣ふ雅人も爲めに亞然たるべし噫慘雅の雪

▲唯一の書物

大分縣　宇津宮精華

嗚呼書物よ汝は萬古不易の吾が友なり世人薄情紙の如く心は板上の玉の如し今朝友にして夕は仇敵變り易きは人心されども書物汝は常に眞心を以て吾を諫め悅ばしめ或時はなかしめ笑はしむ噫又得難き良友なり汝も亦思はん

▲春宵

岩代　太田知二

雨しめやかに降りしきる宵小暗き六疊の間に差しつさゝれつ眼に涙もつ二人連の男女年未たうら若きに何を恨みてか小聲に喞ちつゝ萬疊の情涙を哀れ杯中に落しぬ夜色沈々半宵の鐘聲欄窓を掠めて恨みを惹く事長かりき。

▲都の君に

紀伊國　松山歸舟

床しい薫に迎へられて、窓を開けば、ぞつと迫る紅梅の花香、主待ち顏の、最愛しく、一輪封入しつ花や死しても如何に嬉れしかるらん、願くは私も、心此花の美しさに劣らざらんと、併せて君と眺めん春を。

▲鮮血慘憺

信州　水城翔東

妻動員令に驚倒して遂に不歸。身の出陣眼前に迫る、泣いて二子を托すれ共村役場は不容、決然二子を曳て去る、衆變を聞て到れば主既に不在板上鮮血慘憺、吁何ぞ知らん露兵を斬るに先立つて至愛の二子を刺さんとは

▲羽子板

高知市　、椎野北水

ねえちやん〳〵增子は二足三足逃足を構へたが、例の泣くといふ奥の手が出るので、しかも愛嬌のある口元をわざと怒つた樣にした羽子板をやる

▲汽車旅行所見

筑前　山田以勢

田舍の人は、比較的正直の多さに、汽車に乘るには正直ならず、赤切符にて、二等室にすまし誰何せられざるを僥倖に、一驛も二驛も超へ、次にて降りたるは、綿服の婦人、小風呂敷の外何もなし、近郷の噂々と見たは僻目か

▲道德は悪人の隱れ處

小雲景明

味方多ければ悪も勝ち味方少ければ善も敗るは世の習ひ之を解するもの曰く道德は畢竟社會意志の發現なり而してこは多數者の意志なりと是に依て多數の名を以てせはならざるなし斯くして道德は遂に悪人の隱れ處となれり

▲江上の曲

京城　村上政治郎

轟々と軋りつゝ滊車は漢江上に懸れり頃は冬のなかば鏡の如き月は皓々として江を浸せり時に同車の韓人が謠ふアリラン悲曲あはれ冴へ渡りし寒月の下彼等は知らず亡國の恨み吾は悄然として轉た情の切なるを覺えぬ

▲愛情

肥前　五島孤鶴生

兄さん、な、なんて泣きなさるの、お、お母さんの看病は私がしますから潔く出征して立派な軍人になつて下さい『有難う』思はず妹を抱き上げた腕は戰いて双眼からは熱い熱い袁ゑ切つた涙が連下するのであつた

▲白梅

牛込　綾華女史

かの君は妾の心を知り給ひてや一度なりとも言の葉交して思の川波分たまほしゆう思へども機もなし背戸に立ちて君や來ると待てば月影淡く風も凍りぬ「ワン」と一聲高きポチの聲に驚きて垣の内に入れば香は高し庭の白梅

▲女子と幸福

埼玉縣　倉林染二

女子よ世に幸を得んと欲せば醜たる可し貧たる可し馬鹿たる可し、女子は姝の塊也、美は嘲弄を買ひ富は罵詈を受け利口は絶交の悲境に落さる、斯て遂に愛を得ず、愛無き社交は最も苦痛なれば也、不幸なれば也。

▲失望絶望

越中　岩坪松太郎

三年の戀は破れ十年の苦學名遂に成らず去りとて万能主義の黄金なく悲哉余が境遇常に人後に在て輕侮を受くるの時將に悶死せんとす自今一切の慾望を絶ち自暴自棄の人となり醉郷に入て浮世を逃遁せんとす

▲露

香川縣　大谷馨澄

露そのものは無色である空である然れども自然の眞象をうつす造化の鏡の如く玲瓏として天地萬物餘ます所無く其中に宿し其表に反映せる是れ有色である奇妙なるかな色即是空々即是色の妙理に其れからも悟入る事か出來る

▲朧月夜

青森市　山口惇

朧月夜、笛を吹きつゝ、歌の友を訪ひ來りて、柴折戸の前に竚みぬ、側なる梅の花は、白うして、いと清き香を、ぬるくそよ吹く夜風に、放つなり、吾れは、戸も叩かず、只歌のみ思ひぬ

▲奇と凡

埼玉縣　角田東水

人多くは奇ならざれば則ち凡、凡ならざれば則ち奇なり奇は狂に近く凡は無能に近し而して事業家多くは奇人、夢死の徒多くは凡人、人凡に終らむよりも寧ろ奇に終れ

▲鷲

札幌　片山紫洋

猛鷲北に雙翼を張り、蛟龍東に尾を奮ふ。時に風雲東亞の天に漲り、猛鷲狂ひて毒爪を逞うせんとすれば、蛟龍尊嚴の體を持して、氣色泰然之に應ず、可憐、鷲爪碎けて遂に北海に沒せん

▲墓前

大分縣　長野溪月

斷碑……あゝこの斷碑……眠れるものはそも誰ぞや英雄か學者かはた節婦か懦夫か!!我れこれを知らず噫悟れや人の子早晩汝等も亦「死」てふ惡魔の神に籠絡せらるゝの身なることを

▲朝の書齋

出雲　飯塚雲水

一日夙におき机邊の散亂を拂拭して硯に向ひぬ小雨に綻び初めし白梅一枝手折れるまゝに挿したる其清香脉々として室に滿ちぬるはゆかし、やがて南窓を排すれば水仙の蕾清楚にして愛すべくそぼふる雨けぶるに似てのどか也

▲冬を惜む

島根縣　孤葉

朔風凜烈肌を劈き六花繽紛白虎中天に躍るの酷寒を余は最も愛す而も一たび和風の吹初めてより薄氷もやゝ解け行きて世は再び俗客の騒亂に委すあゝまた來む冬は一年の後我住む地は夫れウラルの山かシベリヤの野か。

▲二月

石川縣　島山智精

ある人の句に「花の咲く木はいそがしき二月哉」と然り昔はさもありぬべし明治の世にありては木より猶忙はしきものあり即ち來三月は學年ぞと一向に心身を惱ます書生輩也われ敢ていふ、「書生等の氣はいそがしき二月哉」と

▲我が友

吳市　隅井甲士

我に友あり、曰く麗藻の友、曰く勉强の友、運動の友、遊獵の友、或は議論に、或は談話に、茶菓に散歩に曰く何々嗟乎何ぞ我の友其類多き而して眞に胸襟を披ひて語る士抑何れの友か今にして既往交友の術を憶へば紅涙慘然

▲秋の蝶

豐後　田丸紫涙

牧場の芒に翅を斜めに暫時の餘命を繫げる秋の蝶一つ、夕日は光弱く一面を照せり、已にして谷より吹き來る一陣の颶風もろくも蝶は吹き飛ばされて高く天に行けり、後は只芒葉のすれあふ音のみ、シャシャ……

▲雪投

越中　森小草

寒風凜烈積雪膝を沒する只中に二十餘の兒童東西二手に別れ息つき敢ず雪の小山を築けり號令一聲雪丸を投げ始ぬ双方必死の勇を皷し飛丸次第に激しく突貫奮進あわや組打ち勝ちし三人は彼方の山に馳せ登り聲高に萬歲！

▲的の誤解

下野　大久保祐之助

御文さん、今度は短文で一等を取りますよ、まあ讀んで見な、『日露外交的破綻により遂に干戈を動す、而して露國は、國際的國家的經濟的人類的觀察に於て人道の敵なり、』大層我國の敵は多いね、それで文戰に優勝だから奇妙。

▲十分間

下野　山本嘯月

もう十分しか猶豫がないな中尉の軍服をつけた年少の士官時計を見つゝ妻を顧た然しまだ子の出ぬので愛にひかさるゝ事のないのは何より上々だ僕は戰地へ行たら充分にやる覺悟だからお前も立派な子を設けてくれ

▲天眞爛漫

新潟縣　石澤嘉內

遊びに飽きて歸る隣の芳ちやんに、それ持て行つちやいけません、貴君の持て來たのは大いの其は內の坊のだからと母かいふと芳ちやん目を圓くして虛言だい僕は叔母ちん見たいに眇(めつかち)でないから良く分らあ僕は是にも閉口した

▲大國の襟度

新潟　島田退藏

前に國家の大事を扣へて、しかも芝居見物をせる、露國軍人。あゝ、この擧動を何と許すべき、大膽とやいはむ、「のんき」とやいはむそれとも、これが、大國の襟度か、呵々。

▲我が思ひ

栃木縣　奥津慶一郎

我が思ひ何も無し又頭中には學問なく財布の中には賓なし然し我が思ひ全く無きに非ず、有る物あり何か曰く希望曰く成功其れ未來には頭中に學問を收め以て成功すべし又從ひて財布の中は金貨の音あゝ是れ空想か

▲詩的の吾里

常陸　住谷治郎

美麗なり此の山、清列なり此の水とは吾眼に映ずる松岡の山川なり、血と涙と戀と愛と、あゝ人々は更に多く此の山川を裝飾するよバルナスの山美神は其處に住めりと、されど今美神は吾が爲に此山川に來り住めると思はる、

▲絆の黒髪

羽後　鎌田富治

文明の日章を照らし野露を滅す千載一遇の好戰場門出の將軍馬上鬚振ふ何者か情なからん愛馬首俛れ左右に家人を回顧して進まず夫人馬前に詰め寄り懐劍一閃長き絆の黒髪切り君が武勳を祈る將軍微笑叱咤鞭聲北風を捲く

▲門出

熊本　仁木正次

嗚呼出軍の門出斯く斗り勇壯なる者はなし時局破裂我叔父も又軍に從ふ曉破るときの聲に夢驚かされつ飛出見れば昨日迄兵見帶の叔父君今朝はしも天晴なる九州男子如何なる功を立べきぞ嗚呼無念我今八年早く生たらんには

▲白人觀

羽後　清山靜夫

白人自ら博愛なりと誇れと吾人は完璧否實行せる者と云ふを躊躇す見よ彼等は保護の暖き許に變民を救助し文明に導くを目的として其實然らず內政の干涉土民の束縛等毫も屬國に異らざる也かくして眞の博愛と稱せられんか

▲露は魯

遠江　敷原茶門

我は神國也日の本也こさかしや露世に蒙昧の魯と呼ばれしを自ら明かき露と誇りしに非ずや然るに今は正義の賊平和の敵討てば即ち日に消ゆる露風に散る露束の間に飜ると知らで日に向ふ露は遂に魯たるを免れさるなり

▲夕暮

小池孟見

落日の岡を眺むれば薪賣りして歸り馬の緩き足搔に暮かゝる煙は麓を罩めんとす搔葉なるらん籠を背に彼方に繞る岨道を一入急ぐ彼は家に見や彼つ人妻か吁山里の靜けさよ今將雲の彩あせて夕の影の增す所聞け一節の木樵歌

▲海

福岡　城戸直次

夕陽雲間を洩れてさゝ波よする海上に紅の錦を織りなす時しも小女子の眞白の手拭を眉深かに冠りて金砂の汀に潮の花を汲みとるさまいと床しかりき

▲老號外賣

上毛・石坂貞次郎

日本大勝利號外々々と見るから哀れげな老人身に着けた布子は拾年も盡した忠義者らしい手に數枚の號外を持つて賣り歩くが少しも買人はないて老人は又聲を振り上げて露國大勝!!!はつと思ふ間もなく多くの拳は早や老人の頭に。

▲花陵山上の八枚石

熊本　松浦道寮

これ鬼將軍の銀杏城築づける折り鐘懸松の鐘聲にて人夫を指揮し享午此の石上にて休憩せられし所なりと云ふ霜星ここに幾百年當時の岩石今尚依然として存すれども石上に憩へりし將軍ははや發星山頭冥界の神たり。

▲漁夫

千葉縣　大本郁文

北風しきり、雪そぼふる寒き夕、浦邊の漁夫の食求むる樣のあはれさよ、凍えく〜て得たる數の魚はやがて最愛の妻子の夕膳の笑とならんといと平和にぞある

▲おぼろ夜

長門　白石無聲

紅燈明き櫻子の空多恨の聲の心に泌み込む巷に俯仰の遊子身は一人、雲の深き月の眞何れに在る、花の饒き花の神何れにか在る、あゝこの朦朧たる春月如何してか塒に迷ふ遊子の心を唆かし美しい夢路に誘はずに居らるゝぞ、

▲日露交戰易斷

東京　浦島不老

雷火豐四交變豐は盛て『享王假レ之勿レ憂宜ニ日中ニ』とある中にも明動相資けて吉を得るの爻位殊に興味あるは宜ニ日中ニの辭で『我が日』『彼が露』なる對照を想合獨笑まれる長くなるから演釋は擱き我國勝と斷案する

▲同じ成行

福井縣　波邊興三市

一面の白雪上にそりを辷らし遊で居る子供等の心と此邊りに小川が有る其流るゝ水の清さと同じで有る此子供等が歳を重て今の世に交り此清き心が濁惡となり此水が流れて海水に交り濁水と變ず其初末甚た同じ成行で有る

▲田舍の春

日向　前田增太郎

梅花は、何しか嵐と共に散り果てぬ櫻花は笑を哺む、田舍の春。高く高く朗に囀る彼野天雀。青毛氈を敷き、黄毛氈を敷きなせる、田舍の田圃。あな心地よや、田舍の春。やよ心の汚穢き人々よ、來りて清めよ、我里へ。

▲理髮師の敵愾心

磐城　只野　清

理髮師あり一日客の髭を剃りつゝ日露戰爭を談ず露は大國日本固より强きもなか〳〵に叶ふまじと客いへば理髮師聞きて然らずといなむ一論一駁意氣互に昂るや理髮師いきなり客の眉毛を剃り落せり亦是敵愾の餘憤か

▲天　地

長野　加藤寛生

天は無限なり地は有限なり天は人類をして空漠たらしめ地は人類をして着實たらしむ天を研究するものは狂死し地を研究するものは洋々として死に付く天地は大小の如しあまり大なれば成功せず小は多く成功す

▲春

徳島市　福島翠軒

雜誌を投げ捨てゝ、自分はふと桓根を見ると、小さな蝴蝶が隣りから飛んで來て菜種に戯れて居る、『兄さん妾一番なの』と突然修業證書持つた妹が、ニコニコして來たので、思ひは破ぶられた。

▲都の天

長野縣　赤岡孤峰

あはれ果なきは定まれる吾の運命かや昔は鵬鳥萬里の志を抱き都の天に花を歌ひし吾は萬事蹉跎して今は寒月雪に蔭るゝ孤り枯骨を擁して忡々の思に泣く而も吾を訓ゆる師なく慰むる友なしあゝ戀しきは夢の昔かな

▲召　集

牛込山北清孝

閨の靜けさを破つて飛んで來た一枚の赤紙「生た的は亦格別だ」と口に勇む程心の中の煩悶は子供の寢顏を窺く眼の怪しく閃くにも知られる送り出されて無限の夫路次から吹き込む風の寒さに見合す顏と顏青白く照す春の月

▲慶應の祝勝提灯行列　神田　多木悦造

實に盛だつた慶應の提灯行列は！殊に二重橋前の光景！何とも云へぬ、萬を以て數ふるカンテラの光は晝を欺く樣で、勇しい奏樂の響！熱を含める凱歌の聲！山なす傍觀者血を籠めたる帝國萬歳の叫！感極つて嬉し涙に咽んだ

▲馬と別れ　茨城縣　岩松霞北子

汝はよく車輪を曳き、田野を耕す我が家の族、然るに今修羅の巷に徵されんとは夢知らず。汝よ心あらば鬣を長く黒龍の水に振ひ、蹄を高く西比利亞の雪に騰げよ。噫汝は我が馬なる哉。別れの門出高く嘶くこと、一二三。

▲燈籠　紀伊　青山秀千代

遣水の涼う置き渡せし前栽に、竹の清げに、露をおびたる若葉の透間より、切子燈籠のきらめしき光を漏したる、風情……、月あるもよしされどなきは一しほ床しくなつかし

▲里の暮秋　大分縣　大津留維一

畑の畔の大きな柿の木に、實一つ殘つて夕風にユラリユラリして居る、暮鐘は靜かに長く余韻を止めて、里の子の子守唄、遠く微かに聞えて居る。

▲春の雨　保田雅海

しめりかちなる春の雨、そぼふりて、桓根越し行路に、差し出てたる山櫻の一枝、花綻びすぎて、そよ吹く風のまにまにハラ〳〵と花瓣の落つるあたり下ゆく少女の蛇目傘の上に一輪二輪他よりは多く散り重なる樣にぞ覺えし

▲殘雪　陸前　山形幽泉

積雪の中より笑ひ初めし白梅も暖かき雨足に霏々狼籍、香漸く衰へてうす〳〵霞む山の頂には皚々として殘雪を認む、うす〳〵と霞む高峰や殘り雪

▲冬のあした　北海道　高草木岸耶

鳥の聲に屹驚して目を醒し外を見れば日本晴雀は松の木てチエー(ゴロ)は裏庭

て雪に梅の花の樣な足跡付てゐる時に樂しけな兄弟二人くる弟はしく〳〵泣き出す「兄」あれ號外よ日本大勝利ぽーは日本男子でないのかいと、

山形縣　佐藤吉次

▲自然の白狀

長松その烟管は何所で買つたハイ昨晩洗湯屋より歸る途中銀座の小間物屋で大分いゝ品だのういくらだつたそれはわかりません、いくらてすかおや御前買つたと云ふちやないか値を聞かうと思ふのに店番が居ませんでしたから

府下　村井霞峰

▲勇士梶村

『我罌丸を拾ひ來れ』と何等の悲壯ぞ旅順港頭奔濤碎波に點ずるの時唯想ふ甲板に睨む勇士梶村氏。卿が求むる其が玉は今將に彼得斯堡に向て驀突しつゝあり

麻布　杉山竹雪

▲雷

南椽の障子に眞黑な可愛い影法師は今年四つの四郎ちやん、ピカリッ、ゴロゴロ〳〵といふ雷にワーッといふ聲諸共四郎ちやんの目からは可愛い夕立。

▲星夜の感

仰げば尊し星夜の大空星相犯さず照渡る、想へは卑し地上の我等秩序を亂して相爭ふ、夫天地は相對す豈矛盾すべけんや。噫地の人よ汝等が握れる爭亂の矛を捨て宇宙一致の平和の大道に歸し自然の美に優る社會を成せ

小石川　大山一郎

▲百字文集

「大」は無能を意味し、愚鈍を意味す。象なり象の鼻なり。「小」は敏活を意味し、鋭利を意味す。針なり、針の尖なり。百字文集を世に出すは針の尖にて象の鼻を刺すの快か。

本郷　柏木登美

▲春

ほんにまあ隣の婆は毎日〳〵椽端て虱ばかり採つて居やがるな、あら口へ入れて潰す汚ない！おや今度は居ねむり……と透垣のぞきの囁き!!折しも一聲郵便『東京向島の叔母ゞ』

神田　千葉江村

▲祝捷會雜觀

芝　吉田公木

祝捷の萬燈を眞先に立てたる一行の歡呼を却てうるさしと云はん斗に脫帽だにせず足早に行過る一老兵卒あり列中忽ち「咄不禮漢」の聲頻に起る知らず罵るものゝ怒と罵らるゝものゝ怒と何れか小なりや

▲麑　島

麻布野田急仁

袂破りといふ大密柑や馬背に二本しか積めぬといふ櫻島大根の產地は又南州翁や樺山伯や權兵衞大臣の產地である由來『ちいどん』國は獰猛の實體日本民族中の低氣壓と言うてよからう

▲疎くなりし人へ

芝區栃原靜子

別後早く既に二年有半便りなき君の消息を待つと宛然春に誘はれし處女の婚儀を待ちわぶるにた似りさはれ此所に多くを識さんも五月蠅かるべければ左に拙歌一首を呈せん。隔つれば疎きが常の人の世に君斗はと思ひしものを

▲瀑布の所感を記す

麴町村瀨知彰

瀑清幽なる乎懸巖百仞密樹蓊蔚たる所奔放直射險飛千丈の雪曜々たる金鑼粉抹に座し忽ち青忽ち紫忽ち赤彩色艶麗淸と云はずして何とか云ん若し明月天空に懸り萬山聲なきの時瀑に對する感想は盖し幽寂の靈妙を自覺す可し

▲睪　丸

東京府辻眞一

睪丸こそ男子にとりては其の本領をも其の精神をも代表するものなれ恰もよし時や來れと力込めたる彼の睪丸般々として激したる一丸の爲めに二丸を失はんとは男子の本領是に於てか絕無絕無嗚呼せめては欲しきかの一丸

▲四　季

東京府清水皷動生

永きも花を見る日は殊に短かし、夏の激しき日は暮るゝぞ樂しけれど木の葉散る秋の夕暮はなきぞよき結ぼれる氷柱の消ゆる隙もなく。暮行く冬の日の短かさよ。

▲琴の音

東京　黒本俊男

夜の淋しさを車上に眺めて進む、行く手に松見ゆ、其の下を過ぐるに今朝情死ありしと車夫語る、吾は忽ち一種の感にうたれぬ、ふと吾に返へれば車は燈火窓に明き家の前に止りて琴の音は聞ゆ。

▲山家の冬籠

神田白霓郎

一家團欒の爐邊父は好める卵酒に快き笑を浮べて母と語り吾は燒栗嚙りつゝ日頃會心の書を誦せば妹唱ひ弟之に和す宛然是天使(エンゼル)の聲、時に外面は吹雪亂れて裏の竹林に雪折の音凄まじ、されど吾家の中には和き春風ぞそよぐ

▲一輪の菫花

東京府　橋本諒亮

軍士徴に應じ命を犧牲にし以て一腔の熱血を敵陣に灑がんと妻を離し心縞に一蓮托生を希ふ妻恨を飲むで更に曰く何等の無情何等の冷情積年の厚契此に於て絶ゆか女操此に於て止みぬるか嗚呼眞に掬すべきは菫花一輪の美

▲炭團

赤坂區　杉本藻花

夜はふけて、炬燵將に冷えむとす、炭團嘆じて曰く、噫我何ぞ薄命なるや、健なる時は人我をまた磨かされば光無し、炭團たまなり磨けど光無しと又終期には我功を賞せず、形許しの我灰を央ばしにて破るとは。噫浮世かな

▲釣魚

芝區　高橋林三郎

綠なす草木も眠る夏の日の西に傾きて僅に衣の袖ゆら〳〵。小搖きの川柳なよ〳〵と脊中を擦するに心も寄せず。しづ〳〵消え行く漣波の面を護りて脇目も振らず釣する三人の村童、竿引く度にさゞめき笑へば草に露宿りぬ

▲爐の線香

小石川　長谷部隆諦

さても君の生涯の短き事よされども嘆くな君の頭の金冠は人をも世をも輝かし吐き出す一語は九重の天を衝くもしも黄泉の人にし成れば死骸(むくろ)は子孫の座に歸り餘影は周圍に芳ばしし君や永へに冥すべし。

▲祝捷會雜觀

芝　吉田公水

祝捷の萬燈を眞先に立てたる一行の歡呼を却てうるさしと云はん斗に脫帽だにせず足早に行過る一老兵卒あり列中忽ち「咄不禮漢」の聲頻に起る知らず罵るものゝ怒と罵らるゝものゝ怒と何れか小なりや

▲麑　島

麻布　野田急仁

袂破りといふ大密柑や馬背に二本しか積めぬといふ櫻島大根の產地は又南州翁や樺山伯や權兵衞大臣の產地である由來『おいどん』國は獰猛の實體日本民族中の低氣壓と言うてよからう

▲疎くなりし人へ

芝區　栃原靜子

別後早く既に二年有半便りなき君の消息を待つと宛然春に誘はれし處女の婚儀を待ちわぶるにた似りさはれ此所に多くを識さんも五月蠅かるべければ左に拙歌一首を呈せん。隔つれば疎きが常の人の世に君斗はと思ひしものを

▲瀑布の所感を記す

麹町　村瀨知彰

瀑清幽なる乎懸巖百仞密樹蓊蔚たる所奔放直射險飛千丈の雪曜々たる金鑼粉抹に座し忽ち青忽ち紫忽ち赤彩色艶麗淸と云はずして何とか云ん若し明月天空に懸り萬山聲なきの時瀑に對する感想は盖し幽寂の靈妙を自覺す可し

▲睪　丸

東京府　辻眞一

睪丸こそ男子にとりては其の本領をも其の精神をも代表するものなれ恰もよし時や來れと力込めたる彼の睪丸殷々として激したる一丸の爲めに二丸を失はんとは男子の本領是に於てか絕無絕無嗚呼せめては欲しきかの一丸

▲四　季

東京府　淸水皷助生

永きも花を見る日は殊に短かし、夏の激しき日は暮るゝぞ樂しけれど木の葉散る秋の夕暮はなきぞよき結ぼれる氷柱の消ゆる隙もなく、暮行く冬の日の短かさよ。

▲花と葉

浅草區　稲見芳之輔

梅の咲けるさま淑女の笑ふが如く櫻は藝者の笑ふか如く桃は女郎の笑ふに似たり、梅の葉は奥さまの如く櫻は腰元、桃は未亡人の如し又松は文士の如く竹は墨客の如し、

▲立派な人

日本橋　石井金囊

世は聲名高き富豪人爵を以て立派な人といふけれど果して彼等は立派な人であろうか如何假令草葬布衣の人でも他に迷惑を掛けず其職にいそしむならば是れ眞の立派な人ではあるまいか余は爾かく信ずるのである

▲刀

日向　仲田秋畦

『さやッ』物凄い女の叫びが鎮守の社の芋畑に闇を貫いて聞えた忽ち警察の提灯が西へ東へ畦を縫うて行つた余は聲のした畑に行かんとする時籔蟲からぴかッと晃めいた闇夜の刀まだ身の毛がよだつのである

▲梅

日向　佐田宣夢

夜な〳〵身を裂かんはかりの寒風を堪へ忽ぶ野梅よ、汝か友は不義の快樂を貪りし富豪の床の間に飾らる、されど汝れよ羨むなかれ、哲人はむしろ汝が勇ましく運命の風波と戰ふを賞せん

▲亡客の魂

廣島　林幹雄

八道の故園入るに家無く身は國仇の汚名を受けて異郷假寢の夢十年戰く月下の蘆の葉陰に燃むばかりの其血をばあはれ野狼の毒牙に濺ぎ畢んぬ噫恨綿々雲を破つて南山遠く飛ぶ魂にさても仁川港頭の砲の響やいかに聞えし

▲盲人獨木橋を渡る圖

武藏　杉浦弘

高慢樹下懸崖百尋の溪流あり、急激渦をなす、架するに獨木橋を以てす、橋半盲人あり、身を一條の杖に寄せて除々歩を進む、若し一歩を誤らんか、身は是れ千尋の幽鬼となるや必せり嗚呼危い哉、吾人學海を渡る者感深し

▲戰勝の日和

本郷區　河合小鳥

凄じかつた暴風雨の名殘は、遠く北の方に見ゆる一刷の黑雲となつて了ひ、四邊は洒然として氣溫く、風習々、花も笑ひさう、鳥相和して、戰勝の報頻りに到る

▲天候日記（三月二十一日日曜）

神田　山本風天子

朝妖來雲天を鎖し腥溫なる南風驀然面を拂ふ時に斜照雲を洩るゝも黃塵濛々帽飛び裾飄り行路難し夜頭痛み汗發しそゞろに朔風颯々たるの快を想ふ半宵急雨沛然潑々屋板を撲つ以て稍鬱を醫しぬ氣溫六十度餘

▲雪の景色

神田　榎本穂月

雲か雲にあらず雪か雪に非ず山野茫漠たる一色を得吾其の花爲りしを覺ゆ月光水を射波す又月花水を相映發す之れ水晶宮と云ふ乎又之を銀世界と謂はん乎

▲軍人の妻

芝　松原初五郎

としの頃二十二三の一婦人、愛兒を抱て、横須賀ドックに碇舶して居る某軍艦を一心に眺めて居たが、忽ち兩眼に滿ちて居た紅涙は漲り、愛兒の顏へ、一滴又一滴、吁！

▲母の敎

下野　村田小圃生

愛らしき男の子が海軍服を着て母に手を引かれながら歩いて來る、近寄つて「父さんは何處へ」とさくと「父さんはね戰さに往つたの勳章をお土產に持つて來る」と得意に語るを聞ける母の眼には憂ひの涙が充ちてあつた

▲萬綠一紅

本郷　石田秀雄

峨々たる山嶽は綠草に覆はれて靑く水々の梢は若葉を以て綠に瀧つせは藍を沈め巖は苔蒸して靑く空は晴れわたりて靑し其中に一點紅の五重塔あり

▲空中の戰鬪

神田　栗原陽太郎

吾家に隣り土肥へて餌に富める綠の野邊は雛鳩の領地なり慳惡なる烏常に之を侵す雛鳩遂に之れと戰ひしが敵の鋭き嘴に痛く手負ぬ憎き奴めと吾れは銃を執り一發轟然美事烏は斃る風香ばしき野邊に吾が雛鳩は速に長ぜん

▲青　宵

本郷　篠原彌

月明かにして夜深し南窓の下横斜の影斯の愛す可き詩境無風流なる二個の書生自ら話頭を歌に變ぜしぞ面白き一生の得意に靜に曰く梅が香を送る日頃の文の前今滿月に影寫しけり武骨なる彼れ終に不動の暗香に醉へりと

▲後　姿

品川　津野黑潮

遠寺の鐘夢に聞きて不圖目覺めぬ煎餅布團寒くとも上に情の女羽織妻は尙內職の針の手忙しく燈火の下後姿のしよんぼりと縺れ毛戰く頬のやせ幾許の苦勞嘸と思へば此の腹のちぎるゝよ噫我れ竟に權門に屈すべきか

▲東京から來た男

日本橋　栗原美良

村長さん處へ東京から來た非人とか詩人とか言ふ男を瀧へ案內してやる道でお花つ子に逢つたら金魚が落雁食つて屁ェ垂れた樣な女だと拔かしやアガつたから己は怒つて案內せずに別れちやつた彼んな別嬪を惡く言ふなんて

▲岩上の松

東京　鈴木芳山

さゝれいし巖となりて苔むせり其が年を經し何歲なるか根さし固めて立てる老松蔦生ひかゝり其の年を經し幾何ぞ猶其綠深うしていよよ榮えん岩に遊ぶ万年の龜松に舞ふ千年の鶴岩上の松の榮や久し君が代の千代万代と共に

▲孤　兒

府下　禮翠子

四方に起る凱旋の聲、世界に輝く旭の光、野邊に繁る若草の華實に例るに物無、今しも薫風に送られつ默々歩する乙女子！花摘ん爲？將醻散？誰ぞ知是名譽の戰死士……將軍の孤兒ならんとは折しも彼方に一聲ホヽケキョー

▲日記の一節

牛込　藤澤峰太郎

寒に入りても遂に雪を見ずして立春となりたるに昨夜半頃よりは降り初めけむ今朝見れば梅の蕾を隠し松の緑を蔽ふまでに積りぬされど空は拭ひし如く晴れ麗なる日の光に梢の露も消失せて道のぬかりもはや乾き初めぬ

▲流　水

甲斐　土屋香葉

流水獨り呼いて不遇の我を吊ふの聲今し濕へる我が眼を遠く掠めて駈りゆく提灯の光績て花を欺く花嫁の車思へば終生の怨み僞の世とは云へあゝ露子の君折からさつと吹く風に亡き父母の奥都城よりは青光淡く脆く

▲見ざる撰者を許す

丸龜　三水涙世

顏は丸くて色は銀の御月樣の樣で薄い唇より冷火熱花を吐き十三貫の身を輕く振つて最新東京繁昌記を產み痙攣打つ眼から詩的東京を寫し一人息子の我儘者の如く朝報と二六を去來し拗强て船宿に隱るゝもの之れ銀月先生か

▲希　望

日向　仲田敬一郎

少水常に流るれば則ち能く石を穿つと白髮の祖父君姿正しての御喩し、かくまでわが身を心にかけ給へるか、自然に涙はら〳〵と、逝き給ひし父君の事まで思ひ出されて、木枯ふく夕べ寒月をのぞめば希望の星二ッ三ッ

▲歩　哨

府下　牧童生

滿州の大原吹雪まくる夕森の木蔭に佇立せる日本兵士白き呼氣をふき四方を見張る今しも定かにはからねどまさしく敵の馬蹄の音耳朶に徹す「止れ」されど騎馬の蹄音猶戛々すわもの見せん「止れ」かくてこだまに響く銃聲の音

▲雪夜兵を談ず

武藏　中村馨洲

余一友生と爐を擁して、一世奈氏の史、互に抗辨腕筋を張り、大聲疾呼慷慨激昂して夜の闌なるを覺ゑず忽ち聞く寒颯淅瀝飛蛾窓を撲つが如く寒威戸隙を洩る戸を排けば飛雪紛々滿月皚々たり、奈氏露國に敗衂せし時亦如此なりしかと

▲麥

東京府　中村江北

風吹き野山は何となう寂しくやがては雪となり水は氷と變るなど冬の景色のすさまじき其が中に萠え出づる麥春の光にあびなむか綠の色深ふなり黃金色なす菜の花と打ち交り波打つ樣など春の景色の一かな

▲春景

神田田代香雲

滿野媚景新柳は惠風に媚び百草皆嫩芽を發し靑々として綠深く草花は爛熳として千紫萬紅嬌艶を鬪はし曠漠たる原野綿を綴り紛々たる蜂蝶芳花に戲れて芳春を告ぐ其閑雅一として愛せざるはなし吾之れを作り以て春景を賞せん

▲人と米との競爭

近藤春夫

人の生涯は米と競爭しつゝある也而して最も激烈なる競爭也、之に勝たば飽まで食ふを得べけんも若し之に負けん乎、溝壑に轉ぜざるを保し難し、勝つ乎負くる乎、飽食する乎餓莩となる乎、噫難い哉米との競爭や

▲自然の活畫

磐城清見清

文机の上には菫姫上筆坊を植ゑし小さき鉢二つ三つ、手風琴を弄する小さき主そが前に座せり朧なる春月窓より忍び入りて菫姫土筆坊の優しき愛らしき姿に見惚れ妙なる手風琴の調に浮かれ貌なり、あゝこれ自然の活畫

▲別れの盃

日本橋區　金澤辰生

軍服の釦の凡てを脫して、彼は長嘯一番コップのビーアを仰いだ、浦鹽旅順アレキセーフ、是等の語は卓上の佳肴、更に大なるコップは少量の余に痛切なる一句を以て强ゆるのである、曰く生別死別をかぬと。

▲自然

武藏千島生

天地の万靈生を享けて永遠に活動不斷なるは機と運命との作用が然らしむる所以、されば機と運命とは吾人の生死を掌るもの即ち自然也、自然をば制すること能はず是を人生の通觀とす、咄何等の妄か人生を不可解と呼ぶや

▲有情無情

東京　高津孤城

お坊さん！、お竹に起され表へ出た、やわらかな春の風か、梅の小枝を搖つて、一ひら二ひら前の溝川へ散つて力なく流れた

▲梅

日本橋　鈴木伊太郎

春尙寒くして草木未だ萌蘖せざる頃獨り香馥郁花玲瓏白玉を枝に散ぜし如き實に是れ梅にあらず哉我が机上に梅枝あり日々之を見て學ぶ昔菅公は梅を見て詩を作る我は今彼を見て學を勵む嗚呼實に梅は學者に愛せらるゝ花也。

▲東都月

四ッ谷　貝塚典

昔は武藏野とていと廣き野にて月は草間に出て主なき宿に住み草間に又入りしも今は昔の影消えて月は主ある宿の屋根より出て屋根に隱る思へば昔と異なる有樣となりぬ年毎に來る雁もかくや思ふらん

▲春野の景

麹町　石垣豊吉

南風緩やかに菜の花盛りを盡し、十時の小餐に歸るやあらん、田男田婦白き手拭を被りて悠々胡蝶の如く頭のみ現はし黃金の曠野を縫ひつゝ一際青く畫き出したる小さき彼方の村の端に入りぬ。

▲留守の妻

小石川　浮月

遠征の良人が御身の上や如何にと日頃雄々しかりし彼も、流石に女心の女々しう、愛兒の衣服に入れし綿の白きにも、西伯利亞の、深雪の忍ばれてや、針の運びも亂れ勝ちに、孤燈漸く暗き所唯見る彼が眼には露の光の宿れるを

▲妻の文

神田　林逸湖

一筆申殘候御前樣御出立の折分家の平三が軍曹風を吹かし少しの遲刻を大勢の前にて叱り候事誠に口惜く是も私故と存し命捨て候此上は敵兵を私の仇と思ひ御働き被下御命恙なく御凱旋の時は金鵄勳章を御手向被下度候

▲月と戀

坂間仁渓

寢られぬ窓の薄明り、雲間を洩るゝ影見れば、浮世慕ふか月姫の、寄する光の哀れさよ、月は戀にも似たり皂、まだうら若き乙女子の、仇なる戀に泣くが如、やせたる姫の顏青く、世は好事魔の多くして、空に叢雲立蔽ふ。

▲出軍の友を送る

盛岡　小川秀水

曙の烏が何をか歌はむ、今此連山白雪の鄕を後に遠く綠色を帶び喜邊の地に向ひ名も譽れある戰に身を國にさゝげむと出立する友兄を送る余等に助聲ずるものとは、嗚呼名譽なる君益々獻心以て軍士の鑑となられむ事を

▲少女

千葉縣　遠藤霞舟

勇氣勃々、豪膽斗の如き豪傑も、汝が前には平伏するか、義氣凛々、鬼をも欺く勇將も、汝が前には洩笑するか、あゝげにこそ少女、汝こそは平和を守る大戰闘艦なりしよな、あな勇ましの、

▲訣別

岐阜　伊藤弦月

今しかた迄出征軍を見送りに行つて居た光ちやん『早く大きくなつて兵隊さんになりたいな……僕も帽子を振上げて萬歳を云ふたよね！お母さん、姉さんは弱虫だわ……なぜつて兵隊さんを見て泣いて居たの……』

▲樂しき將來

常陸　小田睡虎

吁實に八年の昔余は其名を貞と呼ぶ花の樣な處女と未來に於て俱に溫な樂き家庭を形造らん事を契りぬ爾來余は如何なる因苦に陷るも是は愉快なホームの籬を結ぶ繩なりと彼女に遣ふ毎に希望の星は愈燦な光を射るのである

▲汐干狩

三州　鈴木重次郎

一家五人保養として汐干狩、白沙青松の磯より淺瀨を傳ふて島に渡り腰掛岩に開くもうまさ握り飯吾は蟹や蝦や海鼠を捕へ又姉と共に蜊、蛤を堀り母は海苔青沙石花菜を採り給ふ弟妹は貝殼を拾ひ蟹を沙上に弄びて樂む

▲磯釣

三州　波邊停吉

波靜に鏡の如き春の海片手櫓に磯邊を流し釣る長閑さ、遠帆はたるみて白鷗は眠る、舟を小島に着け岩を傳ひて、礁間に釣を垂るれば浮標頻に動き一投一舉興盡きず、喜び籠に滿ち夕陽に棹して還る、晩酌膳上妻と佳肴を分つ。

▲春の野

三河　小島伊三郎

月空に懸る處、雲雀天樂を奏すれば、やがて春の野の活畫は開かれぬ、麥苗の綠と、菜花の黃と彩氈を織り、鶯は森に鳴き燕は柳に遊ぶ嫁菜や菫つむ子茅花ぬく少女の愛らしさ、背の稚兒の口動すは母の添乳の夢を見るにや

▲田園の樂

三河國　飯島萬作

垣根に萠えし芹三葉歌人にも見せばや紫玉黃塊霞美しきは茄子と南瓜楚々たる花も愛すへく秋實の累々は梨栗柿市に買ふよりは丹精の味又格別也雞の歌ふ聲長閑に餌を呼びて雌と分ち雌は之を雛に與ふ宛ら此家庭の平和にも似たり

▲貧家の一夜

愛知縣　酒井漾山

寒威凜烈夜將に闌ならんとす忽五ッ許の小兒素裸にて戸外に出され悲鳴を擧ぐるあり何たる悲慘ぞや而も煎餅の如き一枚の薄團を此兒の寢小便に濡されし親の心中に比すべけんや

▲存？癈？

山形縣　南波南海

深更微に三弦を彈ずるの音餘音嫋々として耳孕を打つ、噫！彼の音ありて多くの腐敗漢を生ず癈せ！癈？若し彼の音なくんば最も野蠻的なる多くの犯罪者を出さん！存せ！然らば猶ほ存？

▲夢か、現か、幻か

秋田　伊藤忠一

想起す、それよ我が幼き頃、學校より歸つて來ると、パッチリとした清しい目、ふつくりとした薔薇色の頰に笑を浮べて兄さん、と呼ぶのが常であつた、あゝこれが戀の始めであつたらう？

▲胡蝶

福岡市　谷口天飛

旅より旅に花をもとめて飛びこふ胡蝶汝れこそ誠の詩人なりけるよ歌はなけれど其氣高き思其みやびたる姿あゝ汝けがれなき詩人よ身は旅にして露草の床に眞如の月蕭條の雨にのぞみて汝れは果して如何なる感想をかなす？

▲若菜摘み

但馬　間島貞幹

煙かと云はん許の春雨によろ〳〵ともれ出でたる若草、木の間に囀る鶯の音、いかにも愛情起るなり、遠く臨めば雪かはた霞と疑ふ春の日に頭に手拭戴き、片手に鎌を携へ、片手に籠をさげ、畔道行く乙女や、實に樂しからん

▲我が戀

茨城　野口雲梅

死なば諸共にと誓ひてし彼女はあゝ！或雪の朝天つみ空に影きえて、わが胸の縺れ解く人もあらぬまゝ月明の夜半、思出多き觀音墓地をさすらへば早咲きの梅一枝、長く新墓に垂れて葩、彼女に似たり！

▲雲

南總　岩瀬櫻涸

中庭の池の蹈石に立て水に映せる桃の花を眺めて居たるに向岸の下より一片の浮雲顯れ出て徐々池底を流れ行くを見ては余は宛然雲の上にあるが如き心地せり雲よ心あらば我願を許してよ余は汝が美翼にのり清き天國に赴かむ

▲腰拔の良藥

茨城　宮本武藏

世にはをたやかなる傾城の一指にだに倒れんとする者あり今や國家有事の時なるに彼等若し立たずんば速に慚死すべく然らずんば懺悔して忠孝の道を盡せ甘言は耳に逆ひ良藥は口に苦きも必ず其効あるに氣付かざるや。

▲弟

越後　堀金一郎

日露間の關係は愈々其極度に達し自分も召集令狀を交付せられ出發すべく命ぜられたすると弟の芳坊は大勇みで兄さん戰にゆくの僕等の先生は今度も日本が勝つ帝國萬歲兵士萬歲あら兄さむ萬歲と弟は自分に元氣をつけて呉た

▲花の品さだめ

愛知　三浦倫子

梅は德高き隱士の如く水仙は才貌ありて男をもたぬ女の如く牡丹は紳士に似て芍藥は其妻に似たり海棠を深窓の佳人とせば緋木瓜は其腰元とや云はまし櫻は武士梨花は處士椿は俗吏桃は俳優李花は未だ售らざる貧女にも似たり

▲人の一生

相模　川戸溪韻

芽み生長し茂り紅葉して落つ是落葉の生涯也生れて立ちて食て物云ふてヨボヨボして死す是れ吾人が生涯也。落葉と人生と其生涯に於て何ぞ擇ばんや。而て物云ぬ丈落葉の方が增也此點に於て吾人は慥に彼に一籌を輸す。

▲雪の夜

大坂　竹内完二

雪霏々天地一白枯樹花咲き列寒堪へ難くして爐を擁し茗を煮る夜色沈々として飛雪愈頻に唯庭前の竹林爆として聲あるのみ時に突如郵便脚夫信を投じ去る見れば戰地なる愛子より發せるもの老人が胸中の心情之れ如何。

▲比叡山に登る

京都　田上嘉藏

今日は紀元節天はれ日暖なり友を拉して比叡山に登る故らに途なき所をよぢて流汗涔々たり頂に達すれば雪猶深く風强しされど遠近の景一望豁如即ち襄をとき又氷雪をかむ、げに夏と冬は同時に來し心地ゆかし

▲日露

紀伊　小磯覺法

天に登らんと欲すれど道なし何ぞ横道逕せんや一朝風吹きて櫻花爲めに飛び後初めて眞如の月あり

▲春雨

尾張　大内春子

床に活けし花の香の餘りに高きに丸窓そと押しあけぬ、雨はいつしか止みて庭の面の若葉一しほ色をましぬ、紅梅の枝に張りし銀の網一ッ主やいづこに行きし、露の重味に花びら花園の坦を登りつゝありしてゞ虫の角に落ちぬ

▲遺愛の軍刀

山形　諸橋千代松

忘れはせじ我等が泣て聖詔を捧讀せし時我兄上は遼東の野に儚くも黄泉の客となり給ひぬるを其は名譽の戰死にも將病死にもあらざりし其時我は誓ひぬ此復仇を然るにあゝ愉快ならずや今吾其遺愛の軍刀に仇を撃たんとす

▲幽雅の春

下總　工藤美義

塵の巷を遠ざかりたる山家の春の靜けさよ悪風徐に吹て梅花唇を開き鶯嬌音を弄す綠溶々たる小川の邊には楊柳千絲の枝其嬌たる容貌娟たる姿態長袖紅裙翩々として美人の風情にも似たるかなあゝ心地よき幽雅の春

▲小犬

山口縣　岡本水竿

『雪だぞ……雪だぞ……』と弟の聲！『消えすにあれと樂みし……』早起の隣の種ちゃんの歌ふ聲！あはれ今迄靜かなりし池面の薄氷は無殘や小犬に蹈み破られ……驚き出づる其の魚を小犬は喰えて遠く遠くに……

▲道義の敗頽に勢也

三重縣　服部露舟

澆季の世將た墮落世界とは近世流行語の如く然り然れども是れ自然の勢也然るに是を責めて智力の進歩を云ふなし誤れる哉三千年の昔老子は曰へり大道委れて仁義出づと若夫れ澆季墮落せざらんか孔子も釋迦も何も糸瓜のみ

▲無價の珍寶

羽前　小野翠

同窓の『ヒルダ』は正直な大工に嫁ぎ『ヂョセヒン』は富豪の夫人となつた後邸宅を新にさせ、あらゆる善美を盡して『ヒルダ』に誇つた『ヒルダ』意とせず自家に迎へて無價の珍寶を示したソハ何、搖籃に笑める子！

▲名札

上野　雪子女史

一日玄關に訪ふ人ありおーと答へて出て見れば意氣揚々と二人の田舍紳士來意を問へば差出だす名刺あな可笑し

元群馬縣士族陸軍歩兵一等卒宮野村役場助役
春田野衛生會幹事吉田村高等小學校卒業

出雲拔助

▲呈銀月氏　　茨城　加藤有禮

朝報社に伊藤銀月といふ世に訣らはぬ骨ぽい野郎が居るそふな、其の新刊叢書の批評欄で烏を黑く鷺を白しと誰れ憚からず天上天下唯我獨尊と言ひ退ける所、眼光烱々俠骨稜々頭髮蓬々一個の俠骨兒と見たは僻目か。

▲扶桑州　　京都府　水野隆樹

伶人白波いみじき樂を奏づれば、やがて、もやの薄絹かきあげて、柳櫻をこき交ぜし春の錦の舞衣、霞棚引く八重の袖を翻へし〳〵、飄々として東海の濱に、氣高くぞ舞ふ敷嶋姫是れや扶桑州。

▲榮枯　　千葉　鈴木雪窓

春は花を東園に賞し、秋は月を南樓に翫び、酒池肉林清歌妙舞、今や落魄困頓身を寄するに門なく、懸鶉百結路傍に彷徨す、嗚呼榮枯は一炊の夢のみ、權貴を羨まず卑賤を侮らず廉潔自ら養ひ天の化に從ふ亦何ぞ毀譽に動ぜん

▲月蝕　　千葉縣　尾高伯文

嗚呼待ちたる月蝕は今宵である余は雨戸を開け空仰ぐに氷輪の如き月は夜半の頃朦朧に霞み隅は次第に欠けて弦形を作れりそれと倶に蟲聲絶え夜氣陰々として淋しく數時にして弦月も又消えて明皎たる元の姿に復しぬ

▲小用を便ぜし一分時間　　兵庫縣　樋口破衣生

得堪へかねて便所へ馳けつけしは夜の九時頃なりし吾茅屋より障子越しに射出す燈火に早春百花に先立ち予等に送るべき香の準備せる未だ固き梅蕾の浴せる大に風雅に見へし噫寒い早く暖くなればいゝにとつぶやきぬ

▲水　　三州四郎

一掬の水をして其運命を語らしめよ露の雫の集りて落葉の下を潛り溪に出て瀧となりて潭に落ち川となり混々として晝夜を舍てず流れて遂に大海に注ぐ小積みて大を成す其忍耐や賞すべし水なる哉水なる哉我は水を學ばん

▲深山の春

秋田　志賀葛水

いつしか深山の奥にも長閑けき春の廻り來ぬ。谷の鶯軒端に訪れて、鳴く音に胡蝶の舞も樂しげなり、げに樂しきは春なる哉。さるにても我身の春は何時來らんか如何なる花か咲くらむ

▲曉

秋田縣　鈴木孤山

冷く清けき宵風は裏山の松を通して夢を破れり時に曉鐘霜を分けて幽に耳朶を貫きぬ我一躍床を出で東の方を眺むれば寂莫微かに破れ鳥漸く眠をさまし尙鐘聲餘韻をもらす曉鳥啞々として中空に翔け雀は樂敷竹に囀る

▲吾妻

駿河　渡邊於菟

僕に妻あり人呼んで「まーちやん」と云ふ僕亦「まーちやん」と呼ぶ花を欺く艶もなく古今兼ねたる才もなし而も彼女が夕の笑顔と妙なる糸の調とに僕が一日の疲れを慰するに足る萬々今や東西相距る廿里互に語る文一片

▲軍のかどで

信濃　平林すゝき

赤い切符を受けとつた十次郎震へた聲でア、ツイ召集になつたと立上れば妻初菊引とめてオヤアナタとすがりつきて泣き出す「十」オ、そなたも兵士の妻じやないかそーする中に時刻がのびる早く用意を？

▲春の如き國

三河　三浦健三

新春には寒暖計の水銀と同じく人間も膨脹の度を増し小走りが大濶に憂欝は快活に小心は放膽に細語は高聲に手も足も伸び體も心も活動し終には太陽の光線の如く擴がつて渾球上に照臨するは正に我戰勝國の未來にも似たる哉

▲訣別

豐後　佐賀咲光

牧童の歌かすかに日は沒し紫雲やゝに西に消え行く時磯うつ波音靜かに片割月の松の梢に淡く掛りてあまのたく漁火二つ三つ見え吹く風袂を拂ふ嗚呼君今別れなむよ五年の後學成り返へりこむの時を必らずまちてよ君

▲軍事思想

近江國　富田富三郎

都地にては盛んに戰捷祝のあるべけれど、田舍にては戰捷祝とては更になく、軍ばなし抔する人は極めて稀なり、そは他に由る可きものあるべけれど都地と田舍とは其業の異るに由り萬の思想の發達遲きが故なり

▲的は荒野

埼玉縣　岡野孤峯

聲の地に一發、天に再び、見る見る黃菊白菊の碧空に現れしぞ、菊水の例をひきて忠義の志をと物せしか、是れ吾が鄕出軍の士を送る最後の祝報なりき、勇しの兵士は數百の送者の先頭に、漠たる東亞の荒野を的にして。

▲摘草

岐阜　小倉隆藏

若菜が少し許りある小籠を投げ捨て、胡蝶のあととめて、驅け行けども遂にかけおゝせて、梅ちやんは、青草の上にうち轉びぬ。『此籠いらないの』と松ちやんがよんだ、すると梅ちやんは『いらぬ〳〵』とてあたりの草をむしりぬ

▲夕食の膳に今朝の貌

遠江　數原逸郎

豫備召集の來た時我れの事を心配するな六十の親爺が先の短い命をかけて凱旋の日を清水へ祈願するぞといふた折悴は大丈夫だ案ぜずにと一語。昨夜に限つて飲めぬ酒も飲んだ今朝停車場で萬歲の聲に笑ふた顏が復見られうか

▲吾が願

群馬縣　津田烈

敢て高貴を願ふにあらず敢て富豪を欲するにあらず唯山水幽靜の地に住み吾が心を清泉に洗ひ天下の名所古跡を遊覽し春は廣野に徜徉し夏は湖邊に釣し秋は高樓に月を稱し冬は爐側に雪を眺望し以て大に文章を恣にせむのみ

▲池畔の奏樂

大坂市　山木三郎

暮色紅を添ふるの時步を池畔に運びて四顧すれば池面淡水悠々として淸く凍れる鏡の如し、遙か對岸の堤道を行く草負牛の叱られて呼と鳴く聲は遠く松林の風に當つてピユウと云ふ響に和し宛然天女の奏樂を聞くが如し。

▲僕の母ちやん　三河國　三浦　傳

僕を可愛がつて呉れた母ちやんが亡くなつたから今度きれいな母ちやんが來たが僕はやつぱり先の母ちやんがいゝ、いつか乳母が來て先の母ちやんは今の母ちやんがころしたんだといつたがほんとうかしら？

▲さゝ川　美濃　内藤大道

長閑な野邊にさら〳〵と流れるさゝ川の岸に蒲公英や菫の花が美しう影を寫して咲いて居る里の子が魚を取るとて昨日も今日も暮るゝまで樂しさうにその止まらぬ水を掬うて居る

▲あゝ姉君　日本橋　育山耕二

病は愈へぬ、一時危ふかりし此身も今は嬉しく鶯狂ふ梅は綻び、蝶の戯むる櫻も程近く此長閑けき春を迎へた我心、あゝ姉君、雨は戸を打つ寂しき夜も寒さ嚴しき雪の夜も厚き看護の甲斐ありてあゝ今は迎へぬ此春を

▲我が机　東京　小峯秀次郎

嗚呼吾は洋刀もて汝の足を傷け、筆もて面を汚したりき、然れど汝は能く之を忍びて、雪晨月夜吾を導きぬ。嗚呼机よ吾は以後汝が君子の行爲を倣ひて、未來の君子たらん、待ち給へ偉なる机よ、我が成功の近き未來を。

▲客待車　山形縣　依田澤

犬の聲遠く近く聞えて月霜の如し人通り絶えて出店の行燈のみ幽かに見ゆ歸らんか今宵はまだ米買ふに足らず猶待たんか腹はうゑたりあゝ哀れ歸り車に乘らん客もがな

▲露西亞の子　下谷區　外河花舟

海軍服を着て、片手に小さな聯隊旗を持ッた、愛くるしい六ッ位のおさな子が、何かむづがつて遂に泣き出した、なだめあぐんだ乳母が『武雄樣は露西亞のお子ですか』と言ふたらひたと泣き止むだ

▲好景

芝區　大繩花葉

淙々たる水聲は蘆間の孤舟をたゝき嘹々たる鳥聲は彼岸の叢翠に響く澗底の若鮎は洋々として往來す何等好絶景ぞ時に風あり輕舟は小波を起し對岸の怪鳥一聲高し潑たる若鮎は忽として去て影なし嗚呼何等の凄蒼ぞ。

▲カバンと胃

上州　明田川閣外

朝にウンと詰め込んでは正午頃に空になるのが新聞賣子のカバンと胃袋てあるもし一日でも此カバンに詰め込まなかつたら胃袋は如何なるでであらう

▲雪

宇都宮　押木源志知

積りたる雪小一尺見渡す限り野も山も悉く銀世界と化し萬物は綿帽子を戴たる如く塵離の美觀である此清い雪を踏み分け軍歌の聲も勇ましく學校へ通ふ兒童等！心は雪の如くてあらう僕は坐ろ小川泰山の昔を追想した。

▲寶船

麻布　野元綱通

吁快なる哉便々たる腹の神を美しき女王の神の滿てる寶船を枕下に引きて今攻露の夢見むとす吁快なる哉乞ふ寶船よ余をして攻露の夢を見せしめよ浦港を打ち落し西比利亞の野を踏み果ては聖ピータ迄吁快なる哉

▲みどり子の手足

上毛　鈴木蘆水

其の紅葉の如き手は一本のペンを以て風雲を動すべく、世の關の扉も開くべし、肉豐に愛しき其足は、全世界も、茨生ふ世の山も怒濤叫ふ世の海も蹂躙すべし乳房を探る其手母體に踞する其足、如何に靈妙の力籠もらずや

▲あゝ佳人

麹町　三木駿南

あはれせの君は敵彈にあたり給ひて身は千々なる我が想ひ哉紅涙寫眞に滴るとも亦動かずみ魂はあらじものをアゝ炎の息や敵をこそやかめイヤ思ふまじき事なりあな慕める薔薇黎明の星……

▲納豆賣

四谷　河村正之助

筑波颪は骨を徹す樣な冬の朝、人通も疎な街を霜蹈で納豆賣る女あり、其の垢染た袷、長刀然たる藁鞋、糸の樣な聲張上て呼び歩く姿のいかに貧苦の樣見ゆるか、あはれ昔は北廓の名花一代の榮華を夢みし身の末路

▲酒戒

和歌山縣　室井義隆

人の氣風を活潑にして勇氣を勃興せしむるは酒に如くはなし然れとも其度を過る時は溫厚靜肅なる人も變して輕躁兇暴となり靄々たる和氣も忽ち變じて烈風暴雨となる其害大ならずや是れ一利一害の理にして世人の戒む所以なり

▲春の月

神奈川縣　中村治輔

足曳きの山鳥の尾のそれならて長々しき春の日も入相告くる鐘の音の消えゆくまゝにさし昇る月のいと眺め床し折しも花の香さそふ春風につれてむら立つ雲の間にかくるゝぞ千々の黄金を失する心地すれ

▲良家庭

駒場農科大學　内田龍洲

純血アラブに鞭うつて歸る吾が家の門暖かに、迎ふるものは淑德の閨秀、紅葉なせる手に欝採る愛兒、ひらりと隆り給ふ將軍の鼻を擁せし美髭、却て口を圍む、駿馬悠々兒に從ひて厩に行く、嗚呼日本魂の良家庭。

▲三助

小石川　芳嶺

冬夜風呂に行く初めて入る者はあつしうめよと呼ふ二度目に入る者はぬるしたけよと叫ふ之かために焚き之かために水を汲む三助また難い哉世皆然り獨り三助の處世難のみならんや

▲萩

愛知縣　鶴田萬三

ながむれば昨日けふのしのをつかねる雨に美人にたとへられたる萩も無情の土に敷かれて冷やかな夢をむすぶ憐れさ！、あゝ人の盛衰は此のやうでもあらうか!? 折りしもれ來る琴の音あゝ人生五十年!!!

▲新鶯

鳥取　澤口蘆村

流石に山間僻陬の地もけふ此頃は積雪漸く消え果てんとして山野の霞も雪解の霧と共に立ち初めぬ鶯も口を解きて二三日來嬌音いとも滑かなり總ての事都人士に後れ勝ちなる僻地も是れのみは誇とするに足る乎

▲扇の詩

熊本市　久連松冰花

いとしの妹先つ程美くしき扇求めたりとて歌かきて玉ひねと云ひ越しければ吾はそを快く諾して一詩をかき與へぬ然るに其の詩の靈や脱けにけん萩散る頃に扇の所々虫に喰まれたる跡ありと妹よりの文あり、面白からずや。

▲回想の橋

筑前　福間峽月

今宵もまた五年むかしを偲ぶ可く吉水橋にはイみたりしが悲しからずや回想の月は早も西の山に入り果てぬ、されどなほ去るには忍びず戀しき人の名を呼びても見つ低徊多時夜はたゞに更け行きて流れの音空にひゞくも星默々。

▲外交破烈

備中　佐藤峠朔

あゝ外交は破れたり、何が故に破れたる乎？曰く彼れ我友誼に報ゆるに侮辱を以てしたるによりて、何ぞ我れ戰ひを好まんや、旭旗向ふ處古來敵するなし、況んや支那の保全てふ義の爲めにするに於てをや。

▲親しき友へ

福岡縣　大城万里

春深き君が溫情秋高き君が潔心おゝ幾度か霧ごもり行く生が心をして清き月の夕に導き給ひしよ、あばれ霞にねふる朧夜にさまよふ生が身をして長へに曉天の初光に浴せしめ給へ

▲亡父の聲

長門　小野芳耶

あまりなる暴風雨に堪へかねて跡戻りせんと思ひし折しも今や同胞は敵奴と戰ひ日々快報を送るにあらずや吹くもの何ぞ降るもの何ぞ進めよ吾子と亡き父君の怒りを含みたる音聲來りて我を鞭ちぬ

▲逝ける友

岩手縣　小原信一

吁々逝けるか吾が友よ吾れは休みを得故山に遊ぶの時病舍に呻吟せる君は辛くも身を起して澄める月下に互に喜悲を語り別れぬ噫神ならぬ身の此の一別何ぞ永訣と思はん今や澄める月はあれど語る君はなし吁眞に逝けるよな

▲嗚呼雀

大分縣　森哲二

あな哀れなる最も小さき雀よ!!彼は常に多くの食物を持たずして寒威凜々と筋骨に透すの候時としては如何なる餌を得るも彼にとりては甚た困難なり

▲八戸出師軍人家族救護會と仝慰問會

伊藤喜平

救護會は慰問會に合併の交渉を開き議論の未、羊頭を掲て狗肉を賣と罵倒した基督敎の傳道は廢せぬ、求むる者に與ふ出來得れは露國出兵の家族の慰問をも辭せぬと答へた怒色滿面國賊露探の言を殘し去れり

▲召集せられたる兵士

八王子　青木條七

今般日露開戰に付急要なるは軍隊に御座候貴兄は既に現役を卒へ御在鄕之處當時召集に依り御入隊と承候此期を幸ひ御奮戰大勝を占め而して皇國の威併びに君が功名を海外に轟響せん事を奉祈候頓首

▲九州男子

肥後　宮崎利三太

さらばよ姉上これが今上の御別れてすと引きとむる姉を銃で押しやり、滊車に飛び込み再び出てず、あゝ其の心根や、さすが九州男子。

▲職分

下野　谷口石山

前途に人爵の榮なく猗頓の利なくとも、我が最も巧みに成し得る職業こそ、我が職分なれ。又他を顧みるを要せんや、夫れ惑ふ勿れ。

▲露

備前　大倉海老生

露よ露葉末の露野邊の千草に置く露よ汝は汝等の運命の如何に脆きを知らざる

か見よ衣の裾に玉は碎かれ袖の羽風に吹散らされつまして赫々たる旭に照されては空敷消ゆる果敢さを斯ても尙汝玉露を以て本領と誇り得るや

山形縣　齋藤湖山人

▲故里

さても戀しき故里さてもさびしき旅の空身は學の園にありながらかいなき事を綴るも吾が心盡きせぬ名殘り有ればなりいかにせば只た友の音信れ待つばかり嗚呼戀しき故里より飛ひ來る雁に故里の音信聞きもせんかな

伊豫　天映

▲明け方の一瞬時

フト目を覺すと早や窓の硝子が白んで居て隣家で戸を操る音や車井戸で水を汲む音がカラ〳〵キイ〳〵と響て居る內庭の鳥屋から鷄が飛びおりバサ〳〵と羽搔をして一聲高く歌ふと此度は時計がチン〳〵と六時を報じた。

栃木縣　白滝藤平

▲酷寒

風寒うして寒氣骨に徹するの朝雨戸ををせば枯れ果てし籬の朝顏には霜の花を

咲かせ樹上にはふくれたる雀二羽體を合して止れり之れ恐く雌雄ならむ樹下には鷄一羽片足あげて蹲り後に十字形の跡をのこしたり

長崎　城戸菊松

▲無情

小雪チラ〳〵、寒氣肌を劈くの夕、年の頃五拾許の老爺尻切れ袢纏一枚にボロ〳〵した腿引を穿ち、さも寒さうに「うどんヤーイそばウー」と顫ひ聲吁天は何故に斯くは無情であるか、此寒空に此重荷を況して此老人に

奈良縣　茨木利雄

▲山里の秋

夜半夢さむ、即ち窓の戸を押せば、なかば落盡せる葉の樹に結べる、露は玉をみがきて凄然たり、仰げば空には孤月むなしく、長風の上にすみ、萬籟寂然、只鹿鳴の呦々たるを聞くのみ

台北　中山長次郎

▲隨筆

日本男子の特長たるや志を忠義に存じ以て國に報ずるにあり今や日露戰端を開

き世界の耳目を引けり眇たる小軀を奉じて國家の干城となり天下の大務に服す壯天地を窮め快萬古に亘る

京都市　山本花子

▲春雨

點々又點々一滴毎に數を增し今や雨脚繁し庭前春といへども艶色なし唯梅花の雨を帶ぶるも尙凛として薫を放ち吾をして羞色あらしむ、桓根の若草愈綠色を增し我目を喜ばす徒然なる哉けふ一日鶯來りてわれを慰めむ事を

伊藤嘉平

▲趣味

金儲けにも趣味あり勉學にも趣味あり其趣味を知らずして必要となす欠くべからずとして此れをなすは苦痛のみ古來聖哲と云はれ富豪となりし人は堅忍耐苦凡人に過るものあるものの如しと雖皆其間に趣味を知り苦痛を感せずして趣味に游ひつゝ其域に至れるものなり

▲元氣

おつ母ちやん此れ！着重ねの袷一枚、母人に手渡すより早く、どゝするのてふ間にも答へで、胡蝶に競ふて一目散！菜種花散る畑道經て八重櫻の下へ走る勇ましさ、うゝ元氣がと男親はニコニコ〳〵

千葉縣　遠藤霞舟

▲春色

日影が麗かに輝いて炭竈の烟がのどやかに立登つてゐる、老爺は今し採つて來た蕗の薹を餘念なげに整へて居る、折々面を上げて彼方の獨木橋の方を見るのは里へ出た妻の酒買ふてくるのを待兼てゞあらう紅梅がほろ〳〵と散た

下野廣野健司

▲朝曇

煤け窓より洩れ出づる柴煙の末、朝靄淡く罩めて、茅檐日未だ上らず、古旗の風にひらつく音して半ば禿げたるが夕馬車の轍のほとりに、鷄頭赤く咲こぼれつ、蹄荒らかに土を蹴る痩馬の息白くして朝曇の空に喇叭の響ひえず

大阪市　黑田重太郎

▲兄の友

横須賀　五味文奴

去年の觀兵式に、君のおすがた見てより、たゝ戀しと許りなり、妾は一年生の時君は四年生やさしく妾に物敎へくれ、兄とは無二の友なりし君今は天晴の將校となり、さぞ滿足におはすらん、最一度やさしきお言葉を

▲運命

愛知縣　成田鵜羽

今し山の端に落ちんとする三日あまりの月の光寂しげに村外れの豪農の土藏に影を印して行く貧妻の背には子を負ひ冷へし手に持てる布呂敷つゝみは今よいの晩餐の料なるべし嗚呼富なかりせば

▲訣別

千葉縣　堀川蘆洲

阿父さん戰に行つて又歸つて來るの？軍服姿の父の腕に抱かれながら四つ五つ許りの愛くるしい小兒が突然叫んだ頭をたれて父も母も祖母も默して一座寂然外面には幾旒の旗獵々として見送りの村人は犇々とつめかけて居る。

▲紙

奈良縣　森崎芳三郎

あゝ驚いたね、君は一度習字をするのに、なぜそうはねをする、紙一枚も國の寶殊に今日のやふな時は特に儉約が肝腎だろ、なに僕の家は紙屋だから……

▲神の境涯

岐阜縣　丹羽辰太郎

神の生命は永久不滅にして神の德は廣大無邊也神の智や圓滿普遍にして六合に照臨し神の力や變通自在にして宇宙に透徹せざるなし吾人亦智德の圓滿にして活力の自在なる神の境涯に達せんことを務めざるべからず

▲死と生

埼玉縣　黑田巖麓

何方より生れ何方へ逝くそれ死生は至難の謎、聽て彌さも明日を保せず脆さも亦明日を保せざる也、天然は人に告ぐるに汝の死より生に來れるが如く、生より死に歸れと、死生一如。噫。生も天、死も命なる哉。

▲第一國民兵

山梨縣　齋藤嶮岳

年老たりと云玉ふな、生年僅に三十六歳、數年間の軍隊教育は何の爲ぞ、此腕以て哥薩克兵を擒にすべく、此脚以て阿爾泰山を跋渉するに堪たり、加之一片稜々の倭魂は、年と共に益々光輝を加へつゝあるものを。

▲訃音

安房　渡邊芳雄

吁回顧せば冬季休業で歸省された時であつた中央の文壇觀も說かれた學校の有樣も話されたそして未來の大希望も述べられた予は必ず將來大に爲す有の少年であると信じて居つたが吁夜半の電報は今まだ夢か幻かのよゝ。

▲何ぞ職業に貴賤あらん

神奈川縣　廣田長重

われ馬上にて一地方を過ぎしに、路傍の小童叫んで曰く、『あれは馬力馬だ、ふだん車をひいてるんだ』と、さもひやかしげ也現社會の惡思想は彼等小童にまで及べる乎、嘆ぜざるべけんや。

▲雪の道開け

下野　宮西平太郎

僕が舊十二月上州の田代へ商に往つて歸るさの雪晴れに道開が有つた其れは空馬百頭許り峠路を鈴音寒く一歩は高く一歩は低く雪の中を蹣靴滑らして馬が倒れる人が笑ふ笑ふ、人が倒ふと一寸起られぬ此が男女交だから面白い

▲暮鐘

横濱市　齊藤龍溪

逝きたる人の棺淋しく出したる夕、佛前の新しき戒名のあたり、香の煙細くさまよふ時、浮世に殘されたる一族の、互に慰めつゝ悲み居たる折しも、陰々と傳へ來る山寺の鐘の音を人々の昨日に變りて如何に聞くらむよ。

▲十分春になつた

岐阜　和田孳溪

陰地の殘雪も全く消ゑて、梅も咲き、鶯も鳴き霞も棚引き、柳も青くなり、吹く風も、降る雨も皆春のになり、そして薪も値がさがり、木炭も安くなつて、これで十分春になつた

▲罪なき笑聲

福島　大須賀三村

今は休憩時間なり、我が運動場には、習々たる春風吹き渡りて活氣充滿しぬ。甲所に一郡の男生、乙所に一團の女生、追ひつ追はれつかけくらべ、聲高に罵り叫ぶそが内に、罪なき笑聲も混じて、實に面白げなり。

▲夢

山形縣　鈴木忠吉

月明に風清く草根にすだく虫聲唧々たる秋の夜には誰しも故郷の思はるゝに余が手にせる封書には故郷より父の訃音思ひ掛なき悲報に接し悄然たる折しも破窓の隙間から吹き入る寒風ゾッと身にしみ渡て華胥の夢を破られた

▲山里の雪景

山口縣　林利治

夜半の嵐凄まじかりし翌朝窓を押し明くれば野も山も一面に白金の莚を敷きわたし萎樹枯草も一時に花を開きて滿目皚々たり稍ありて赫々たる太陽照り渡れば眩きばかりの壯觀を現ず、げにも壯快なるは山里の雪景かな

▲祝辭

山口縣　武石孫市

諸君多年の勉學茲に卒業の證書を受く是れ余の深く感喜措く能ざる所なり惟に學海は渺茫たり冀くは其方針を確定し航路の狂瀾怒濤を蹴り遂に蘊奥を究めよ即ち獨り諸君の光榮のみならす亦永く模範を本校に胎さん請勉めよ

▲憶浮世

岡山縣　堀口鑒川

訣に誓た言葉、「貴郎の出世して御歸り迄假令五年は十年ても必ず御待ち申ます」此言葉を忘れねばこそどうか一日も早く出世の曉その喜ぶ顏見たさ一念漸々望み遂げて歸た今日思は仇、噫薄命の我を殘して待人は既に居なかつた

▲吾人の覺悟

靜岡縣　村松彌太郎

日露兩國の平和破れて茲に戰爭となり豫後備兵亦召集せらる豈國家の重大事ならずや此時に當て吾人家に在るものは能く出征軍人をして後顧の憂なからしめ層一層勤儉に以て富源を豐かならしめんことを心懸けざる可からず

▲二宅先生

鎌倉川岸　須田嘯雲

某女學校教師に三宅某あり、彼の吹けば飛ぶ、灰殼を氣取り、其延ばしたる髪を丁寧に梳りコスメチックの香紛々、女生等陰に嘲笑して曰く『三宅を改めて二宅先生と云ひたい位だわねえ』二宅は即ち柔弱を捫れるなり、

▲葉書にて

日向　大内五南

今宵は實に寂しき夜に候盤若寺の入相の鐘は無限の哀韻をこめて枯葉を響かせ耳を訪れ申し候雨の音は幽かに之に和しをり候古人の詩今宵初めて其妙を感じ候然し乍ら寂寞は又趣あるものに候

▲饗應に預りし後に謝禮の文

富山縣　重原一小耶

拜啓昨日は參上仕り御優渥なる饗應を被り美酒佳肴の珍味に飽き遂に酩酊して歸宅の際などにも碌々御暇乞も不申欠禮多罪今朝に至り恐縮至極に奉存候條右御禮迄乍略儀寸楮を以て申上候

早々不一

▲白百合

豐後　右田俠骨

見さくる脚下萬仞の絶壁、溪流怒號して凄滄を極む、下らんには路なく、渡らんには橋なし、吁、吾年來の宿望は徒爾に歸しぬ、彼岸に匂ふ白百合の花、その清き香、崇き姿に、憧憬れきしものを。

▲朧月

京都府　大北寒月

百戸の漁村は靜かに暮れて終了つて朧月夜の富士はまるで夢の樣に田子の浦を前にたゝへて蘆唾峠と睨合つて居る「健さん貴郎本當に彼地へ行くのですつて？」薄寂しい影が霎時無言で砂上に一つとなつたのである。

▲ニコライ師

京都府　柴山白陽

駿河臺のニコライ師日露開戰前三層樓上に祈ること七晝夜と盡し平和か勝利か將た敗軍か若し夫れ僞りの平和を世界に宣誓せしザアが早く悔ゐ改めの果を結ふべく祈りしならば師や眞に天職を辱めぬものと云ふべし

▲かこひもの

静岡　阿部閑水

路次の突當り亂調の謠三絃の音高く緩く洩來る一家黑塀高くして見越の松枝振よく孑然と淡き瓦斯燈の下に優しい文字に女の名の門札邊り憚る樣に肉痞た丸髷の婦人内を窺ひては行つ戻りつ果は星に向つてホッと溜息!!

▲都と鄙

静岡　波邊紫明

都は海の如く鄙は池の如く人情は月の影の如し海に映る月は其形亂れてまばゆく池に映る月は形正しくして其光きよし蓋しなみ風にゆらるゝ事の多きと少なきとによるならむ

▲刀

日向　鈴木春江

昔は成風凛々たる旗本の中に曉名を博せし此身よ、何の運命ぞや今は孤獨墓なき老の身を貧民窟の中に送るとは、今宵又米を買はなん一片の金もなし、賣らざる可からざるか床上の古刀!!鞘を拂へば閃光冷かに四邊寂たり

▲寺の庭

日向　春田楓崖

立ち並べる古墳二つ四つ、雨は細し、碑の畔の櫻散りて地に泥するあり、枝に殘れるあり、今若き僧は夕べの鐘をつく、響靜かなり、又山鳩眠れる如き聲に泣きいだしぬ。

▲日記の一節

日向　桂田淩雲

都の友より一通の雁信を落手す、彼が落第の二字を記すの時其心中如何なりけむ、萬朝に短文を出す、弟正雄今日より小學に入學す、晩は幾何を讀む、解らざる事例によりて例の如し、但し充分力を盡せり、新聞達せず。

▲教育

姫路　岡本紫峯

引張て見、切つて見、捩ぢて見、植ゑかへて見そしてとうとう枯らしてしまふのは、今の世の教育です。

▲日本魂

秋田縣　萩野亜蔵

登校するのであらう二人の學生は何か話し行くのである而も今のは返答らしく、「何馬鹿な此粗服でも寒を凌げりやよからうそれで目下の場合軍資金へ獻納しやうと思ふてあれを賣ッたのさチェッ女郎買ひの末なんて」と儼然たり

▲僕の三則

群馬　横田民外

僕に三則あり。堅忍、自重、忠實之れなり、自重以て事を起すべく、忠實以て事を行ふべく、堅忍以て事を遂ぐべし。

▲長良川の暮色

岐阜縣　鷲見霞洲

天下の奇觀を以て鳴る我藍川の埠頭雨後雲煙柳塘を包み夕陽僅に搖波を焦し暮色蒼然水天に入る金花山麓蹄帆數雙春風を朶み櫓歌を流して去る晩鐘に促され孤鴉塒に急ぐ不知何處より來て何處に歸るを

▲遺言

岡山市　三好醍月

武士の門出には涙に籠めて遺言細々と記するは聞けど、河豚喰ふ前には物言へぬ不具となるもの多し。

▲母のみやげ

熊本縣　深草保記

隣村のお寺に説教があるので我が母は毎日行て聞るゝのである歸りには味柑肉桂扨ては椎の實抔が孫への土產爾して之れはお父さんのだと四十の我にも一包の粗噫何たる難有さてあらう我は染々其慈悲に泣いたのである

▲朧夜

加賀　四出淡翠

少年の夢にも似たらん朧夜の月を背にしてそろ歩きの我はふと妙にかなつる琴の音を耳にしつ誰が手すさびにやと音を便りにやがて紅梅匂ふ根垣に依れば端したなし一時に舉る笑聲の我等が家主伯爵の別莊とはそも之か

▲落葉の趣

肥前　三浦とみ子

はゝきめうるはしう掃き清められたる庭の面に黄なる落葉の二ひら三ひら落ち散りぬいとうつくしまたの洒掃の勞をもち忘れて見恍るゝ人の罪なき心のいぢらしき。

▲靨

熊本市　平野俊佐久

旭は麗らかに、紅梅の梢を照らして、吹き渡る東風の長閑けきに枝にかけたる籠の鶯の一聲高く鳴き出づれば軒の鸚鵡は頭を傾けて、椽に餌をする少女を見下ろしつゝ「お清さん」此の時娘の美しき双頰に靨表はれて、オホゝ

▲斷腸

徳島縣　平野桂舟

あはれ戀しの君？君の笑まいは、春の櫻花の如く、君の御心は谷川の清水の如く、いとやさしき愛らしき君なるよ、吾は菫花咲く春の野に君と若草摘みし事もあり、さるに今し吾君の終焉の玉章繙かんとは噫天は無情なるかな

▲出師表

岩代　開習堂

余以狂妄暗愚論戰略其度越俎雖得兵家之訕杞憂滿胸是又國人至誠如何得不言哉諸兵應召即日上道無違其命令者夫以小而討大者急劇莫如進軍一虛一實東方虛而北方有實或彼要塞根據之地以斷糧道則兵疲無能戰者於是可治其功也

▲五色の感

岩代　松村貫一

赤きは何？井戸端に米研ぐ下女の頰猿の尻、白きは何？アクビのときの心の中、歐人の顏青きは何？露西亞人の眼、學問半呑の學生、黑きは何？待合狐の腸下二三寸、罪人の心、黄なるは何？曉、峯頭に昇る圖、日本人の顏

▲噫！哀れ

岡山縣　立花香文

梅は今年も荒庭に咲て居るが水は今なほ痩た小川を流れてをるが、さて變りはてたる吾身哉、梅は今年も咲てをるが、君は何處をさまようてをるであろうか、水は小川を流れてをるが、あゝうらぶれの吾身かな。

▲敵慨心

肥後　加納和氣生

何やら大層な勢で内に飛びこんだ弟、忽彼の玩具の船のありつ丈を並べた、兄さんどれ露西亞なのエヽこれ？ウヌ！無慘や其の一は小英雄の足下に碎かれた、紙旗をふりつヽ彼や意氣軒昂万歳々々を連呼するのであつた

▲鹿島路の景

石川縣　松本喜久雄

己が庵の門邊にて、見渡す限り眺めなば卯の方には寶達山、亥の方には石動山、まのあたりには、邑知潟、潟の周りや山岸に賤が屋見ゆるぞあなゆかし、さも面白く、のどけきは綠の山を霞棚引其景は實に繪も及び難し

▲春雨

秋田　加藤重治

雨がばら〳〵と降つて來た雪が消えてくる時しもあれ一人の海老茶式部が學校からの歸りてあつた暫く經つて彼女が轉ろんだ起きて後を見たが何んと思ふたか紅葉の錦を顏に散した雪や雨がまても爭ふかと思へば

▲雪の田園

出雲　四村昂三

見ゆる限りは山と雪だ、其皚白を汚して點在せるもの、動けるは人、動かざるは家、家は烟を蒼苔に向て吐き、人は薪を市に向て運ぶ犬も飛ばず鳥も啼かず、噫靜閑なる哉滿雪の田野！

▲征露

波島　丸岡慶之進

出たる杭は擊たるてふ金言は余輩の恒に服膺して不可忘ものなり抑々彼は國際の道義法規を無視し横暴を擅にし天帝を欺むき而して東洋の平和を破りて出てむとす豈征ざるべけんや我は世界萬國無比の皇國易ぞ己れ暗國と噫

▲兵士送別

熊本　橘谷繁彦

天將に明けんとす遙に聞ゆる大皷の音これ召集されし兵士を送別する人々にていさ行かんと起き出てヽひやと云ふ海濱に至りし頃舟既に出てたり一艘の大舟五艘の小舟に引かれ行く樣壯觀なりき萬歳の聲天地に轟き渡れり

▲友

岡山　原辰治

僕に莫逆の友人がある未だ嘗て僕を怨まず憤らず常に談論娯樂して居る或日僕が宴會に臨み稍亂に入らんとした時急用の言に託して僕を連れ歸り閉室に休ましめ靜に頭を冷しくれ耳近ふ口を寄せ君腦に酒は最も惡いぞと云つた

▲小樂園

羽前　石川流水

姉の笛月にひま無き蜘網の歩を留め妹のバイオリン夏知らぬ莨の水を斷つタの園や涼しき團扇つかひて新草を品評する吾には麥茶くんで呉れるとて三度目にやつと三分一程汲みて兄樣と誇り顏の聲軒の虫よりも淸し

▲朝陽一陣

栃木縣　若林元四郎

一孕の妖雲アルタン山頂に起る忽にして空を掩に天地暗黑たり瞬間支那朝鮮を壓し增々猛惡を極み全力を盡くして直に日本海を突かんとするや俄然富士山頂より朝陽一暉して妖雲無形只アルタン山頂に日章旗の翻へるを見る

▲盲兒

茨城縣　小崎陵之輔

獨りの小兒は暖なる莚に猫を友とし樂しく戯るゝ折しも半空に凧はうなり初めぬ首を傾けて見なんとせし瞳子に唯眞白く瞼を溢れて軈て涙は頬に傳へたり吁天地情無きか可憐の兒仰げば日輪光り嚴めしう然れども吁然れども

▲娘巡禮の魂

長崎　佐藤堅水

小じんまりと兩側に淋しく軒り合ふて居る藪影をいつもちび〳〵と深い小川かぬ悲哀の調を合はして居る此上の土橋が近在に恐ろしい雨夜の名物ずつと向ふ藪續きが一團の穢多村昔し此所を通り過ぎた娘巡禮を此谷底に無慘にも

▲見送り

陸中　藤本長藏

充員のため召集を命ぜられたる友を見送りて停車場に至り互に一盃を取替す間もなく列車は進み來りぬ、勇氣滿々たる吾友は汽笛と共に別れを告げた、數多の戰友の乘れる列車は轟々たる車輛の響を殘し北方指して立去つた

▲歳費を復舊すべし

野州　松本秀五郎

行政整理を迫る議會、先つ議會の刷新を謀れ議會の刷新を謀るは、歳費の復舊より宜きはなし歳費復舊は國勢の動機たり立憲の基礎堅く文明の潮流高く義勇の精神貫く軍旅は愈々强ふして國民は增々熾也、軍國議會夫れ之を成せ

▲胸のなやみ

陸中　北條健次郎

心强く益夫大事に育てゝくれよとの生別の御言葉に滿州の野に赴きし脊の君よ、妾は夜の明けなん時君が父母の邪慳なる鞭に逐はれて去らんとす最愛の子を捨てゝ?!あゝ刻一刻と死境に迫りつゝある身を知り給はずや。

▲夕暮

岐阜　波邊雨葉

遠寺の疎鐘餘韻を大空に響かせ乍ら陰々として川面つとふて消えて行く、花散る春の夕間暮、綾子は新聞片手に、遙るかシベリアの天を打眺めた、心に『どうか敏雄さん無事て……』と祈つた、されどあゝされど……

▲日本刀

若狹　岩川平助

あゝ此秋水滴る日本刀之を揮へは邪爲めに逃れ妖爲めに走る或は發して三韓征服元寇塵殺となり或は鷄林の蹂躙頑清の膺懲となり或は醜露征伐となる向ふ所風靡し至る所戰慄す實に神國の鎭護神なるかな

▲岩上の乙女

靜岡　大石種龍

戲言(じゃうだん)に挿た柳が付いたじやないか?聲冷瓏として天空を驅り星辰も又其瞬きを安めんとす夜既に三更岩頭に黑影あり此れ即ち唄の主而も年若き婦女にてありけり、時に波間に男の聲あり、思ふて叶はぬ事はない。

▲出る日入る日

岐阜縣　萩野陽月

出る日は勇ましくして希望の光あり、入る日は優しくして慈愛の波を送る、出る日につけ、入る日につけ、たゞ想はるゝは我が戀の行末あはれ、我が戀の行末やいかに。

▲春の散歩

静岡縣　荒波健吉

梅花滿開の時親しき友と手を携て散歩せし折りしも何れよりか香氣を送りて二人の心を空外に放つが如き感あり又彼方にては二人の話を嘲るが如く梅の枝より愛らしくホーホケキョと鳥の聲

▲堇

京都府　水谷萍花

里川の清き流れに姿を寫し、なよ〳〵と立てる一もとの堇あり、打ち萎める葩には胡蝶も飛ばず金龜子の影も留めじ、麗かなる春風輕く吹きて忽ち彼を奪ひ去りぬ、無情の流水之れを載せて將た何れへか行く、

▲堇

神戸市　丹野梅之助

お前こんなもの捨〻お仕舞ひ、君何んだ此んな者大事そうに。幾度も母や友達からなかば嘲弄の言辭を呈せられたこれ色はあせ香は失せて居る紫の堇一つ併し我れは之を捨てるに忍びないのである、たとへ何んと云はれても。

▲朝

長崎市　中村勝一郎

鷄鳴一聲曉を告げぬ、臥床を離れて東天を望めば、夜來の暴風雨止んで、庭は一面梅の花池は水溢れて植木鉢の總てが顛んで居る、吾の水汲まんとて井戸端に立つ時「あゝ昨夜は酷い風だつた」と、隣家の細君嘆一つ。

▲桃の節句

常陸　小松崎正眞

はや陰暦の節句となりぬ空はいとうら〳〵と晴れ渡れり桃は爛熟となり梅花は已に散らんとす麥はいよ〳〵青く菜花盛りとなりぬ、野に出で見れば土筆菫なんど簇々と萌へ出てぬ野には百千鳥の囀るを聞き吾家の梅には鶯吟じぬ

▲花の床

牛込　桑原村笛

詩人西行は曰く花の下にて我れ死なむと、吁花や花や、汝は美の精、詩の化身、思ふだに心浮立つ陽春四月櫻花の風に翻る時、花の下花の上清香に醉て呼吸ひかばいかに面白かるべき花よ願くは我に心を許せかし。

▲馬

滋賀縣　大四孤月

陽春の水で頸髪を洗ひて馬は、今し一兵士の命言を頸垂て聞き居る、我汝と雨霖の日雪紛の夜も苦樂共にする茲に二歳、時移り折り來て今や極東の野に轟然砲煙を見る又生死を共にせむと頸一打馬欣然として歩を始めぬ。

▲百合の花

岐阜縣　山川太六

溪のあなたい美しに白百合が一もと、自分は如何かして手折らんものと茨を分け岩を踰ゑた、既にかうよといふ時俄然忌々しい青大將奴が鎌首擡げて根下から、世間此れによく似たものがある、それは女の……

▲曉の筑波嶺

茨城縣　波邊博

鷄の音に目を覺まし急ぎ寢卷の儘起出づれば未だ宵の中で素鼠の空には明かな星が晃めいて居る前は茫とした田の面で遙か地平線上には夜目にも鮮かな筑波嶺が宛然黑繪のやう、神秘平和美妙、あゝこれ自然の美。

▲春の雪

下總國　鈴木虎月

『雪は降つてくる銃砲玉飛んでくる其の中切り込む日本兵――おう寒うッ!!』路次へ入つた小僧二人、乙う氣取つて相合傘、手拭ぶらさげて洗湯の戸をがらり『日本勝利でお目出度う』後には春の雪ちらり〳〵

▲居候

名古屋　不老泉

獨立自活の精神なく依頼心の人を居候と云ふか吾人一日浦鹽斯德より引上げし某を訪ふ氏の曰く彼の地は頗る居候的の人多く且可愛がられ能く威張と余聞き終て啞然たりア、慘なるかな獨立の精神なき亡國の民咄

▲新落梅花曲

駿河　高橋瓦一

佐保姫一夜舞の袂のえならぬ移香に散ろ浮出て給ふ、香に辿り寄りし梅園、御心鎔けむ許り、うか〳〵奥に入り給へば、暗を劈く梅が香高くして思はずむせび給ふ。鈴の御聲天に響き花は鏘々散るに嚶嚀の音あり